

ココロ
HEART

↑ アートって、書けるんだ。 ↓

アート ← コトバ
ART WRITE

第3回
高校生アトライター大賞
優秀作品集

 筑波大学 *University of Tsukuba*

2009-2010

目次

1	応募規定抜粋
2	選考結果
3	選考経過
4	選考委員講評
12	大賞
22	特別賞
24	優秀賞
72	事務局後記

図版の掲載について：本作品集では、受賞作品に引用された画像等の著作権に配慮して、受賞者本人に著作権があることが明白な図版以外は、一律に削除して刊行していますのでご了承ください。削除した図版にキャプションがある場合、キャプションのみを掲載しています。

第3回高校生アートライター大賞応募規定（抜粋）

- 趣旨** アートについて書く高校生のためのコンテストを開催します。執筆を通して、アートの意味を考え、新しい文化の創造と支援を担う若い感性を育みます。
- 課題** アートについて経験したことをもとに、自分の考えを伝える文章を書いてください。
- 「アート」の範囲** 中学校・高等学校の美術教科書に掲載されている内容等を参考に、執筆者自身が自由に判断してください。
- 募集部門** 制作体験 自分が作品をつくった体験をもとに書く
作品探究 アーティストがつくった作品について書く
芸術支援 アートと人々の交流について書く
- 応募資格** 高等学校ならびにそれに相当する公的教育機関に在籍する生徒（個人）。
- 賞** 大賞3名 優秀賞20名 学校賞 入賞者には賞状と副賞を贈呈します。
- 選考委員** 穴澤秀隆（『美育文化』編集長） 奥村高明（国立教育政策研究所教育課程調査官）
光田由里（渋谷区立松濤美術館学芸員）
岡崎昭夫 長田年弘 五十殿利治 斉藤泰嘉 寺門臨太郎 直江俊雄 守屋正彦（以上、筑波大学教員）
ならびに筑波大学学生代表
- 書式** 個人が日本語で執筆したもの。2000字以内。アートライター大賞のホームページからダウンロードしたファイルにコンピュータで入力してください。図版を入れる場合はJPEG画像等を文書に直接貼り込んでください。図版は文字数に含めません。参考にした文献やウェブサイトなどの資料名を必ず記入してください。
書式の例や執筆に当たった参考資料も、アートライター大賞ホームページから見るすることができます。
- 提出方法** 1.応募原稿
2.応募票
上記二つのファイルを電子メールに添付して送付してください。
学校など一つのメールアドレスから複数の応募者の原稿を提出しても構いませんが、一件の電子メールには一件の応募のみを添付してください。提出後、受領確認のメールを返信します。送信後1週間以内に返信メールが届かない場合は、アドレスをよくご確認の上、電子メールで問い合わせてください。
- 応募締切** 2009年10月26日（月）午後5時到着分まで
- 結果発表** 2010年1月頃、電子メールでお知らせします。
- アートライター大賞ホームページ** <http://www.geijutsu.tsukuba.ac.jp/~awa/>
- 提出・問い合わせ電子メールアドレス** awa@geijutsu.tsukuba.ac.jp（高校生アートライター大賞事務局）

個人情報の取り扱い等 ご提供いただいた住所氏名等の情報は、本プログラムに関する用件のみに使用します。応募原稿の著作権は、筑波大学大学院人間総合科学研究科芸術専攻に帰属します。応募原稿を出版物やインターネット等で公開することがあります。

電子メールでの提出について アートライター大賞では以下の理由から、すべて電子メールで応募する方式を採用しています。1. 電子ファイルで選考することにより、多数の選考委員にコピーした場合に発生する膨大な紙資源の使用を節約できます。2. 電子ファイルを原稿にして優秀作品集の編集・刊行が円滑に行えます。3. 応募者はコンピュータに習熟できるとともに、わからないときにまわりの人々にサポートしてもらおうなどの交流を通して、より多くの人にアートにかかわってもらうことができます。

第3回高校生アートライター大賞 選考結果

2010年1月 筑波大学大学院人間総合科学研究科芸術専攻 第3回高校生アートライター大賞選考委員会

応募総数371編 (各賞受賞者名を五十音順に掲載)

大賞 (4名)

坏 竜馬	きれない	大阪府	大阪府立港南造形高等学校	2年
岡崎 瀨波	無常の起点—鴻池朋子展によせて—	ニュージーランド	Oxford Area School	3年
木下 遥	大きなプランコと小さな私	滋賀県	滋賀県立膳所高等学校	1年
三文字 昌也	文化祭ポスター制作記	東京都	筑波大学附属駒場高等学校	2年

特別賞 (1名)

久志本 彩花	美しさを語る。	静岡県	浜松学芸高等学校	2年
--------	---------	-----	----------	----

優秀賞 (24名)

荒木 絵理	墨の声を聞け	北海道	北海道立大樹高等学校	1年
石丸 夏海	『生』	福井県	福井県立高志高等学校	2年
市下 純子	一期一会	熊本県	熊本県立第二高等学校	2年
大久保 友香	小さなゴジラはわたしの魂～一塊の土に宿ったいのち～	滋賀県	滋賀県立膳所高等学校	1年
大澤 夏実	伝える	滋賀県	滋賀県立膳所高等学校	2年
小山 景子	ロダンに目眩する	福岡県	九州産業大学付属九州高等学校	3年
鴨河 愛	子どもと大人と高校生	大阪府	大阪府立港南造形高等学校	3年
木村 真奈	風を感じて	滋賀県	滋賀県立膳所高等学校	1年
後藤 めぐみ	アートと音楽	熊本県	熊本県立第二高等学校	3年
志田 雅美	ぼてたまご	静岡県	静岡県立清水南高等学校	1年
田中 百子	舟越桂の世界	栃木県	宇都宮文星女子高等学校	2年
田中 伸明	楽譜における「アート」性の問題について	千葉県	江戸川学園取手高等学校	1年
田村 弥都	S T R A N G E	熊本県	熊本県立第二高等学校	1年
角田 淑美	G I F T A R T ～ありっただけの気持ちを込めて～	群馬県	共愛学園高等学校	3年
津屋 敬弥	アートの素晴らしさ	滋賀県	滋賀県立膳所高等学校	1年
中藤 裕子	白の巨匠	滋賀県	滋賀県立膳所高等学校	1年
中山 綺華	ヒューマン・アート・ヒューマン	熊本県	熊本県立第二高等学校	2年
西村 美萌	モノクロームの写真	大阪府	大阪府立港南造形高等学校	3年
野沢 れい	命	北海道	札幌平岸高等学校	2年
林 遼	勇気ある芸術家、ベルニーニ	三重県	皇學館高等学校	1年
早藤 優樹	モノクロの世界を抜け出して	栃木県	栃木県立宇都宮中央女子高等学校	1年
深須 砂里	失いからの再出発	群馬県	群馬県立西邑楽高等学校	3年
藤 真知恵	聖母と天使のひかりとひかり	滋賀県	滋賀県立膳所高等学校	2年
山下 真依	苦痛による覚醒	熊本県	熊本県立第二高等学校	2年

学校賞 (9校)

大阪府立港南造形高等学校	熊本県立第二高等学校	筑波大学附属駒場高等学校
九州産業大学付属九州高等学校	札幌平岸高等学校	栃木県立宇都宮中央女子高等学校
共愛学園高等学校	滋賀県立膳所高等学校	浜松学芸高等学校

選考経過

2009年4月 第3回高校生アートライター大賞募集開始。郵送ならびにウェブサイト上での告知。
2009年10月26日 受付終了。応募総数371編。

第一次選考通過者名（五十音順） 応募作品は、筑波大学大学院生と教員の代表による第一次選考で109名に絞られた。

青木仁美	宇田晶	川鍋慶恵	下津理彩子	津島亜実	東出花菜乃	山岸美穂
赤澤菜摘	大久保友香	川村陽平	神浩介	角田淑美	廣瀬里凡	山口沙耶香
坏竜馬	大澤夏実	瓦谷知沙	新戸小百合	坪田叡伴	深須砂里	山口亮介
浅岡美優	大城丈宗	木下遥	鈴江隆志	津屋敬弥	藤真知恵	山崎文菜
浅野恵	太田英伶奈	木村真奈	鈴木茉衣子	中藤裕子	藤生紗季江	山崎開
荒川達哉	大本純平	久志本彩花	高井あまね	中山綺華	松野千華	山下真依
荒木絵理	岡崎瀬波	小坂惇	武村有紗	中山咲子	松原みやび	山田莉星
石原加奈子	岡庭萌	後藤めぐみ	田中勝也	成澤諒子	松村大	山本圭亮
石丸夏海	小澤七海	小森友貴	田中紬	西村美萌	御崎翔太郎	與倉潤也
市下純子	小田真弥	酒向花織	田中伸明	野沢れい	水野和	吉田るい
伊藤はるか	小山景子	佐々木友里花	田中百子	萩野絢子	見邊紫	四井枝音
伊藤美希	嶋崎明香莉	澤野桐子	田中里沙	橋本隆宏	宮田理恵子	和佐一希
伊藤瑞希	加藤陽二郎	三文字昌也	谷川愛	畠山美玖	宮本健太郎	鷲足遥平
井上詩織	兼崎裕子	塩路友紀	田村弥都	初田清佳	本村優貴	
上田智子	株本啓佑	志田雅美	田村勇真	林遼	八木瞳	
植村和也	鴨河愛	清水春奈	津下みなみ	早藤優樹	矢島詩織	

その後、筑波大学学生、大学院生、教員の代表による第二次選考で、入賞候補29名が選出され、最後に、外部選考委員と教員代表による最終選考会議で、大賞、優秀賞、学校賞等が決定された。

選考基準：

第一次・第二次選考では、以下の観点を重視して選考を行った。

内容面

1. アートに関する自分らしい見方、取り組み方がよくあらわれている。
2. 対象とするアート活動について、読者に伝わるようによく説明されている。
3. 読んだ人の関心を引き起こし、強い印象を与える。
4. できれば間接的な知識だけより、自分の実体験をもとに述べた方が望ましい。
5. アートに関する基本的知識に重大な誤りがない。

形式面

1. 文章の流れが一貫し、伝えたいことがよくわかる。
2. 自分の考えと、それを裏付ける具体的な事実の記述との対応がとれている。
3. 調べた知識や引用と、自分の体験や考えとが明確に区別して書かれている。
4. 日本語表記に重大な誤りがない。

ただし、形式面より内容面を重視する。

最終選考では、各委員がそれぞれの専門的観点から評価、意見を交換し、受賞者を決定した。

第一次選考委員

大学院生（博士前期課程芸術専攻芸術支援領域）：秋田美緒・市川寛也・大塚希・水澤真理子

筑波大学教員：直江俊雄

第二次選考委員

学群生（芸術専門学群芸術学専攻）：赤間和美・岩木美里・喜代吉鏡子・後藤由紀子・鈴木湊・高橋翔・橋本亜由美・石田佑佳・輿水愛子・志村春海・善名朝子・松永彩佳・丸谷由紀子・本村恭子 大学院生（博士前期課程芸術専攻芸術支援領域）：秋田美緒・市川寛也・大塚希・水澤真理子 筑波大学教員：岡崎昭夫・長田年弘・五十殿利治・斉藤泰嘉・寺門臨太郎・直江俊雄・守屋正彦

最終選考委員

外部選考委員：穴澤秀隆・奥村高明・光田由里

筑波大学教員：岡崎昭夫・長田年弘・五十殿利治・斉藤泰嘉・寺門臨太郎・直江俊雄・守屋正彦



最終選考会議の様相

もっと悩め、深く悩め

穴澤 秀隆 『美育文化』編集長

君たちの美術理解は ヤバくはないか

もしも君たちが「美術作品というのは、人類の偉大な文化遺産の集積であり、犯しがたい崇高な価値があるものだ」と、のほほんと思っているなら、そいつはちょっとヤバイぞ。

なぜなら、ここには美術というのはこんなものだという固定観念にちゃっかりおんぶしているお手軽な精神あるからだ。

美術や芸術が歴史的に受け継がれてきた人類共通の財産、つまり「文化」だという認識はたぶん間違っちゃいない。無論、大切にされるべきだ。でもね、財産というものは、どうしたって目減りしていくのだ。大事に飾っておいた模型飛行機が、いつの間にか壊れてしまっていたり、お宝のカードがどこかへ行っちゃまうのと同じ。どれほど保全に努力しても時間の経過とともに文化遺産が部分的に消滅していくことは、ある意味宿命と言っていい。だけど、心配すんな。だって、ぼくらの時代が新しい文化を創造している。だから人類の文化遺産は目減りしていくどころか、ますます厚みを増しているわけだよ。

美術の中で考える

じゃあ、どうして新しい文化や芸術が創造されるのかということだけど、これは、それらが固定的なものではないからだ。別の言い方をすると、美術の場合、「何が美術なのか」は時代とともに変化し、それを考える

ことが美術の重要な要素になっている。ただ、この場合、「ハテサテ、美術や芸術とは如何なるものであろうか」と、金魚鉢のなかのキンギョを眺めるみたいに外側からみっちり観察して判断するような方法はどうか。

「美術とは何か」というチョー難問は、そういうやり方では答えが出て来ない気がする。では、どうしたらいいのか。ぼくの提案はシンプル。それは美術をする中で考えていけばいい。

表現する、考える、そして書く

例えば絵を描いているとき、彫刻をつくっているとき、「こんなものでいいんだろうか」って君たちは思っているよね。ほらね、そのときに「美術とは何か」って考えているんだよ。つまり芸術活動というのは、それをする事自体に表現の意味を問うことが含まれている。

自分の表現に絶えず疑問を抱き、不安にさいなまれ、悩んで苦しんで、それでも描くことや、つくることを投げ出さなかった人たちの表現はつよいメッセージをもっている。これに出会ったとき、ぼくらはガンと感動するのだと思う。

さて、もう気づいてくれたかな、考えることがどれほど美術に大切かってことを。

考えたなら、今度はそのことを文章に書こう。表現する、考える、そして書く、これらは実は一体のことなんだ。

悩むことは才能だ

大賞受賞作品のうち、岡崎瀬波さんの「無常の起点—鴻池朋子展によせて—」は、新しいアートの世界を瑞々しく感じ取っている鋭敏な感性に共感が持てた。坪竜馬さんの「きれない」には、他者の視線の中で揺れつつも自分を確立しようとしているところに真摯な姿勢が感じられた。木下遥さんの「大きなブランコと小さな私」も、あくまでも自分自身の表現を貫くことの困難さと不安が素直に表現されている。この三人に共通しているのは、今の自分に戸惑いながらも、根底では肯定的に捉えている点だろう。三文字昌也さんの「文化祭ポスター制作記」は、制作体験を通じた自己との対話が独特の詩的な文体で綴られており、資料として添付された作品の質も高く評価された。他方、久志本彩花さんの「美しさを語る。」は、ギャラリートークの体験を通じて、アートのコミュニケーションとしての可能性に注目した社会的な視点があった。これは前期4人の自己表現の苦闘とはやや異なるので、特別賞とした。

これらの人たちはみ～んな深く自分を見つめて悩んでいる。悩むことは苦しい。でもね、それも一つの才能であり、努力も必要だという気がする。悩むこと—、それはいつかきつと大きな喜びにつながる。だから、もっと悩め、深く悩め。

恐ろしき高校生たち

奥村 高明 国立教育政策研究所教育課程調査官

先日、全国造形教育連盟の公開授業で小学生から高校生まで糸鋸を使う場面を見ることができた。小学生は驚くほど達者に、中学生は見事に、高校生は職人のように使いこなしていた。子供の成長の速度がおそろしく早いことを実感した。そういえば、18歳前後で賞金王やオリンピック代表になる。高校生には大人もかなわない力がある。その力を発揮する場面を、私たちは用意する責任があると思う。「高校生アトライター大賞」の意義は、そこにあると考えている。

「きれない」～表現活動は閉じた行為ではなく、他者や社会と関わり合う行為であることを改めて確認した論文である。本論は作品に対する作者の責任という困難な問題に直面する筆者の葛藤を表している。そこには、他者と関わり合って存在する自己という哲学的な問題も含まれている。それを自分の制作の過程を振り返ることよってとらえようとしている。しかし結論は出されていない。それは、容易に解決できない問題であるというだけでなく、それは自分で解決していかねばならないという宣言が含まれているからだと思う。

「無常の起点－鴻池朋子展によせて－」～鑑賞とは、作品の色や形、感覚や経験、文字情報など様々な資源が関係する複雑な実践であると思う。それはひとたび「書こう」とした途端に、そのまま自分に襲いかかっ

てくる性質のものであろう。まして一点ではなくストーリーのある展覧会である。これに対して筆者は、自分の身体を手がかりに立ち向かっていく。心臓の鼓動、筋力、感情など自己の反応を確かめながら進む。それが最後までおれることはない。だからこそ、生命力という結論にたどりつくことができたのではないかと思う。

「大きなブランコと小さな私」～指導の残酷性は、大人の固定観念にある。完成すべきスタイル（大きなブランコ）が子供の前にあり、子供（小さな私）は涙をこらえて絵を破くというささやかな抵抗をする。誰もが思い当たる胸の痛む事例である。ただ、それを解決する手段が、やはり絵を描く行為の中にあると本論は言う。表現で流した涙を、自らの表現で克服する。それを教師が期待するのはあまりに都合がいいと思うが、少なくとも子供が大人の知らぬところで教育を救っているという事実は素直に受け止める必要があると思う。

「文化祭ポスター制作記」～デザインは、単に主題を美しい色で表すとか、用途を満足する形をつくるということではない。人や社会に深く関わる行為である。その一端を本論は表している。まず、文化祭という「与えられた主題」を「自分たちの主題」として作りだしていく。その制作過程によって、デザインが思考の現場であることを端的に示している。次に、

そうやって生み出されたあたかも現実の一場面のようなポスターが、「これから新しい社会を刻むのは自分たちだ」という自信と可能性を表現していると思う。

「美しさを語る」～私たちは作品に真空状態で出会うわけではない。作品と私たちの間には文化、歴史、制度、経験など、日々更新されるいくつもの層がある。それを可視化するのがギャラリートークにおけるナビゲーターの存在である。本論はこの立場から作品鑑賞を語っている。そして、ナビゲーターの役割が、単に進行役や、知識の提供者ではなく、鑑賞の当事者であることを描き出している。さらに、ナビゲーターと作品と来館者が一緒になって作品を再創造していることも説明していると思う。

このように、今回も、「高校生アトライター大賞」は高校生の豊かな才能を見せてくれた。美術や美術教育の問題に、深く、広く切り込んでいた。その代表が上記5編である。それは、「現在、世界中にある大人がつくりだした問題を解決してくれるのが、今の子供たちではないか」と勝手に期待してしまうほどであった。とはいえ、選考を終えた今は、ただ選評が高校生に伍することを願うばかりである。

第3回高校生アトライター大賞 審査に参加して

光田 由里 渋谷区立松濤美術館学芸員

高校生のみなさんが美術をめぐって書かれた文章を拝読して、やはり美術には人を考えさせ、なにかを発見させる力があるのだと、改めて思うことができました。

今話題になっている経済効率からいえば、仕分け対象になってもおかしくないような、あまり実用的でない面が美術にはあります。けれど何かを作る楽しさ、作られたものを読み取ろうとする楽しさには、実用とは別の、日頃思いつかないようなことに私たちを結びつけてくれる通路が用意されているのだと、そしてそれがとても大切なことなのだ、アトライター諸氏の文章は教えてくれました。

そうした大切な体験は、やはりこのように書く機会があつてこそ意識され、深められ、そして残ることができるのもまた確かです。美術をめぐって文章を書くというこの機会は、重要な成長過程にある高校生の方たちにとって、自分を深めるともいいチャンスになったに違いありません。

今回の応募作でとくに印象的だったのは、制作の現場で先生の指導や評価と自分の思いとのギャップを受け止め、考えを深めながら完成作へと進んでいった、貴重な体験について書かれた文章でした。坪竜馬さん「きれない」、大久保友香さん「小さなゴジラはわたしの魂」、大

澤夏実さん「伝える」、三文字昌也さん「文化祭ポスター制作記」、荒木絵里さん「墨の声を聞け」などはいずれも、具体的な作品の制作に即して、思いが思考へと深められる過程が伝わってきました。美術は、作品としてかたちをとるものなので、自分でも客観的に見直すことができ、ほかの人にも見てもらえるメディアです。だからこそ、別の立場、別の考えを確認しあえる場になることが、ここに示されていました。また、それぞれの考えから作り上げられた作品の図版も、とても見ごたえがある立派なものでした。

また、高校生でありながら日本の現代美術に向き合い、同時代的な感想を堂々と書いた、岡崎瀬波さん「無常の起点—鴻池朋子展によせて—」、田中百子さん「舟越桂の世界」などにも感心しました。美術作品を泰西名画のように天から降ってくる「有名なもの」としてとらえるのではなく、自分たちと同じように考え、模索している同時代の人の仕事として認識するのは大切なことですが、現状ではなかなか簡単にはできないことでもあります。きっとすぐれた指導者の方々がこうした現代美術に触れる機会を用意してくれたのでしょう。今後もこのような体験を積み重ねていかれることを期待します。

ギャラリートーク体験をつづった久志本彩花さん「美しさを語る。」にも興味をひかれました。学芸員と接し、自分で工夫をしてトーク体験に挑戦した意気込みが伝わってきました。その上で美術を言葉で説明することの困難をいつも自分が感じているせいでしょうか、話すことについてもう少し踏み込んだ考えを知りたくなりました。

このアトライター大賞応募作全体について言えることですが、言葉を使わないで表現されている美術に対して、言葉でどう言い表そうとするかということが、重要なポイントになるような気がします。そうであれば、文末を「・・・・」とぼかしたり、余韻をもって行あきで処理するようなテクニックを使うよりも、シンプルに言葉を使つてもうすこし食い下がってほしいとも感じました。

今回の応募作品では、絵画や彫刻だけでなく、楽譜や写真作品にも対象が広がっていました。広く見て、自ら作り、それを通して話をし、書いていくなかで、アトライティングの実りがよりゆたかになることでしょう。そこで深めたことが、さまざまなほかのメディアとの接点の中にも生かされていくことになると思います。

第3回高校生アトライター大賞 選評

岡崎 昭夫 筑波大学教授

高校生を対象にした美術作品のコンテストは全国的な規模から各県の地域レベルまで数多いが、アートに関する制作や鑑賞や活動などの様々な体験を言葉にする文章のコンテストは数少ない。これに応募するには、美術作品の中に言葉はマンガのように含まれていないので、見える色と形から見えない言葉を紡ぎ出すことが必要とされる。この大人でも難しい課題に立ち向かった応募作が300以上も全国から集まったことは、この種のコンテストが意味ある企画であることを示している。

応募作はいずれもアート作品や活動に関する自己の観点や取り組みがよく示され、それらを懸命に読者に伝達しようとする努力が感じられた。そこでは作品に関する知識の解説ではなく実体験に基づく制作報告や鑑賞活動がいきいきと記述され、読者にアートに関する強い興味や関心を起こさせた応募作が多く見られた。2000字という高校生には長文の作文にもかかわらず、問題と探求、調査と発見、自説と例証、検討と結論などによる文章化にいかにも多くの時間が費やされ、その過程でどのように思考が掘り下げられたかが読み取れる。

アートを通して高校生が様々な大人の人々と交流する様子を報告した芸術支援部門、アーティストの作品を自己の視点か

ら批評した作品探求部門、自分の制作過程や作品を主題とした制作体験部門、これらすべての部門において高校生の芸術に対する真剣な関わりが読者に強く伝わってくる。特に興味深いのは、応募作の三分の二を占める制作体験部門において、高校生がアーティストとしての自分への揺れ動く精神状態を内面的に観察するだけでなく、美術教員との間の心理的葛藤さえも冷静に分析していることである

将来の教員になろうとする学生に「美術科指導法」を教える立場としては、「きれない」や「大きなブランコと小さな私」、あるいは「小さなゴジラは私の魂」は是非とも学生に読んでもらいたい作品である。美術教育を受けている高校生の内面観察や心理分析から逆に多くの示唆を得ることができた。これが審査員の一人としての正直な感想であり、高校で美術教育に携わる先生方にも指導法の改善に向けて示唆に富む作品が多く含まれているコンテストであった。

冬かわ盛り

斉藤 泰嘉 筑波大学教授

私の担当する「美術論」という芸術専門学群の授業で、アメリカのポップ・アーティスト、ロイ・リキテンスタインの描いた《ヘア・リボンの少女》をスライドで鑑賞し、さらにその絵に関連付けて『ピチレモン』という女子中学生向け雑誌を取り上げ、さらに「高校生アーティスト小出茜個展女子脳小部屋（渋谷パルコ）」という展覧会にふれ、現代アートについて勉強するという試みをしたことがある。

『ピチレモン』2009年12月号の表紙には、きわめて日本的な万葉美人お多福顔美少女の笑顔写真が大きく掲載されている。少女の顔の横には「スペシャルふろく」として「でかりボン」の写真もコラージュされていて、21世紀日本版ヘア・リボンの少女というポップ・アート図像が成立している。少女の顔の下には「冬かわ盛り200連発」と書かれている。私は授業でこれを「ふゆかわざかり」と読んだのだが、それは大きな間違いだった。「ふゆかわもりと読むのです」と後でレポートの中で教えてくれた優しい学生がいた。

数百数千の小写真が乱反射する万華鏡的『ピチレモン』という迷宮は、無邪気な中学生の世界そのままの、にぎやかで混沌とした異世界だが、さて、高校生になると中学生達の感受性の世界は、どう変わるのだろうか。

アトライター大賞最終選考会議の席上で、ある委員が、「自己表現はネガティブな論調になりがち」という発言をされていた。確かに芸術は自己表現であり、自分が何を表現しようとしているのかと突き詰めていくと、どうしても水の中に潜ったような息苦しい時間をくぐることになり、景気良く「かわもり200連発！」というわけにはいかなくなる。だが、自分と向き合うことを強いられるのが高校生に与えられた試練の一つであり、そこで試行錯誤してこそ大人への成長が促されるというものであろう。右腕を切断した姿に自分の悩みを込めた自画像を描き、それを分析した坏竜馬「きれない」は、高校生の迷いと決意を率直に述べた勇氣あるアトライティングといえる。

応募作を全体としてみたときにも、やはり、制作や社会的行動において自分を知り、成長する姿を丁寧に描く文章が心に残る。優秀賞のなかでは、木村真奈「風を感じて」、石丸角田淑美「G I F T A R T ～ありったけの気持ちを込めて～」、津屋敬弥「アートの素晴らしさ」、中山綺華「ヒューマン・アート・ヒューマン」、早藤優樹「モノクロの世界を抜け出して」、深須砂里「失いからの再出発」など、いずれも高校生の繊細な感受性や他の世代への優しい心配りが感じられ、高く評価したい。石丸夏海「『生』」は、16歳の高校生たちの物怖じしない行動力が素

晴らしい。それは、福井県の『ピチレモン』たちが現代アートに挑んだ元気あふれる物語である。

371編の挑戦者たちへ

直江 俊雄 筑波大学准教授

コンテストは入賞者を選び出し、選ばれなかった者との間を分けていく。しかし最終的に賞に選ばれるかどうかとは関係なく、執筆の過程で育てたアートへの問題意識、苦勞して集めた資料、書いてみて気づいた様々な発見は、他から与えられたものではない、自分だけのアート体験を凝縮したものだ。そこで考え抜いて一步深められた自分の姿こそが、アートからの本当の贈り物だということを、すべての応募者に伝えたいと思う。

今回、企画運営をしながら第一次選考から最終選考まで、371編のすべてに目を通し、涙を浮かべたり、思わず笑い声を上げたり、真剣に考え直したりした。一編一編がそれぞれ他には代え難い体験や思考を伝えており、その一人一人の挑戦を心から讃えたい。

可能ならすべての応募者に敬意を表してコメントを返したいところだが、ここでは入賞者29名についての、私からの「読者としての」、また若干「教師としての」視点が入り混じった言葉を贈りたい。時にやや厳しい注目を述べているように見える箇所もあるかもしれないが、それは入賞という素晴らしい成果を認めた上で、さらなる成長を願っての励ましと受け取っていただければ幸いである。なお、これらは選考委員会としての公式な評価ではなく、私個人の見解である。

環竜馬さんの「きれない」は、作家として自分の表現衝動と社会との間でこれからも考えて行くべき重要な課題を提起していると思う。腕の切断表現を止めさせた教師と生徒のどちらが正しいかという視点ではなく（学校教育の場では適切な指導であっただろう）、衝突や葛藤が生じたことを表現の意味や責

任という問題を考へて行く契機にしたところが高く評価できる。とてもシンプルな文章だが、自分の体験を直視したところから出た言葉なのでストレートに伝わる。この体験から出発して、美術史から現代まで、一般社会の常識から見れば「残酷な」表現をあえて選んでいる作家たちの問題にも目を向けるとよいのではないだろうか。

岡崎瀬波さんの「無常の起点—鴻池朋子展によせて—」。これは詩である。鴻池朋子の作品世界内部を歩く経験に触発された、何か本人の非常に内面的な旅から出た言葉を綴っているようである。現代美術の展示に触れて、これほど魂を揺さぶられるほどの経験をもてるのは、鴻池作品の力か、この著者の内面の葛藤がそれを増幅させているのか。読者の立場からすると、なぜ著者がそのように感じたのか、ギャラリーでの体験と著者の思索との関わりについての描写がもう少しあれば（あえて省いているのかもしれないが）、著者の感情の揺れ動きと、それを通して新たに浮かび上がる鴻池作品の特質に、さらに近づけたかも知れないと思う。岡崎さんは、二年前のコンテストで自分の制作体験をさわやかに綴って優秀賞に輝いたが、三年生になって今度は現代の作家に勇敢に立ち向かい、その荒馬（狼？）から見事振り落とされずに耐えきった。一般的な意味での美術批評や美術論の範疇には取まらないが、独特の文体で読者に強い印象を与えることができたといえるだろう。

一方、今回一年生で制作体験の内面的な動きを細やかに綴り、共感を得たのは木下遥さんの「大きなブランコと小さな私」である。「絵は作者の心を写す」という単純なスローガンが、実際の人の微妙な心の動き

を無視して一人歩きすることがあるという現実に、この小さな子どもの感受性は気づいていた。それを自分の課題として持ち続けていたところに、この著者の表現者としての資質が見えると思う。表現者にとっては、自分が正しいと思える形に素直に出会えることが、何よりも大切なだと気づかせてくれる文章である。

三文字昌也さんの「文化祭ポスター制作記」の文章は、普通の会話のように軽く、断片的だ。それでいて、近代のアーティストに関する知識などがさりりと挟み込まれていたりする。そして、完成バージョンにいたるまでの5つのポスターのビジュアルの強さに引張られて、読者はなんだか納得させられてしまう。締め切り間際に渋谷の街に写真を撮りに行ったという作者と一緒に制作をしているような気持ちになるから不思議だ。ビジュアルと文章のコラボレーションで独特のスタイルを作り出したという点を評価して、従来のアートライティングの範疇を越えたようなこの作品が選ばれた。

久志本彩花さんの「美しさを語る。」からは、ギャラリートークの当事者になるという得難い経験の緊張、興奮と喜びが伝わってきた。こうした前例のあまりないテーマでこのような優れた文章を書くのは非常に難しいので、その貢献を讃えて特別賞を贈ることになった。少し残念なのは、白髪一雄のぶら下がり描画を実践したというせつかくのエピソードが簡単にしか述べられていないことだ。せめてトークで使ったというその実践の写真を掲載できれば、より強い印象を与えられたかもしれない。また、苦勞して練り上げたトークの内容が、何も述べられていないのも残念だ。気持ち

を語ることに成功しているが、具体的な事実を語って気持ちを伝えることにも目を向けられよいかと思う。

荒木絵理さんの「墨の声を聞け」のストレートで無駄のない読みやすい文章は、白地に書かれた一文字の書を思わせる。わかりやすい比喻を用いながら、表現したい作家内面の感覚を伝えようとしている。書の制作について書いているが、ほかの様々な表現活動にも通じる一つの真理を示していないだろうか。

石丸夏海さんの『生』については、日本を代表する現代美術家の先駆けであった小野忠弘との出会い、それに触発された自分たちの制作に熱中する様子に共感できる。小野の作品のどこに魅力を感じたのか、また自分たちの作品の特色について、もう少し読者に伝わるように具体的に書けるとさらによかったと思う。

市下純子さんの「一期一会」は、作家の名前も忘れてしまうような、日常の中でのある作品との出会いに始まり、自分の制作で大切にしている観点とのつながりを、しっかりと破綻のない文章で伝えている。なにげないものの中にある大切なものを見つめることの出来る心と堅実な知性が感じられる文章であると思う。

大久保友香さんの「小さなゴジラはわたしの魂〜一塊の土に宿ったいのち〜」の内容は、アートについての考察を書くコンテストの趣旨からは少し外れているように見えるが、それでも私はこのエッセイが大好きである。小さな子どもが、粘土で羽の生えたイルカを作るか、怪獣を作るか、その選択がアートの観点からどんな重要性があるのだろうか？しかし、作る本人にとっては、賞をもらえるかどうかということよりも譲れない何かがあるのだ。そのことを、微妙な心のやり取りや場面の描写を通して、目に浮かぶように表現してくれている。プロのアーティストでも、他人には見えにくい何か小さな心の砦を守るために戦うことが、仕事の中であるのではないだろうか。

か。そうした子どもの世界からアートの世界への視点がしっかりと述べられていれば、私はこの作品を大賞に推したかもしれない。私が彼女の教師ならきっとその点をアドバイスするだろう。ただ、この著者なら、教師が考えたことを書いて賞をもらうより、自分が本当に納得のいく文章を出すことを選ぶのだろうか。ちなみに私は、このときの頭をなでてくれた先生も大好きになった。

大澤夏実さんの「伝える」は、人の考えの深みに気づかせてくれる貴重な例であると思う。百合と二本の螺旋階段が描かれた絵が生み出される背景に、このような独特の思考過程があったとは驚きである。作者は自分の内面で進化した作品の成長と、それを受け取る人の視線や理解との出会いや距離に戸惑いを感じながらも、自分の表現の道を探そうとしているのだろう。文章と絵の二つが並ぶことによって、独特の世界がそこに表れているように感じた。

小山景子さんの「ロダンに目眩する」では、写真で憧れた巨匠の作品と、その実物を見る機会に恵まれたのに写真ばかり撮っていた経験、そこから直に見る体験と、写真を通しての体験の二つを見直そうとしているところに、作者のありのままの気づきが述べられていて共感が持てる。感動したということにとどまらず、彫刻そのものの特質への考察に発展できるとさらによいと思う。

鴨河愛さんの「子どもと大人と高校生」は、作者の描いた平面作品とともに、彼女だけでなくほかの多くの子どもたちが大人や家族に訴えたいことを伝えているのかもしれない。また、三つの自分が交代しながら作品と向き合っているという認識は面白い。

木村真奈さんの「風を感じて」は、とくに生や死を意識するような苦痛に満ちた経験がなくても、アートの制作について考えること、伝えることはできることを証明してくれる作品だ。自分が影響を受けた作家の説明に始まり、自分の人生の三つの場面と関わらせながら、

「風」というテーマに取り組んだことがわかる。アーティストは感情や経験を色と形で受け止め、表現しているという小さな気づきにいたるまで、一貫してわかりやすく具体的な記述で書かれている。

後藤めぐみさんは「アートと音楽」で、日常の経験から感じた、アーティストや音楽家の間の響き合う関係について、新鮮なまなざしで綴っている。その関連に気づいた喜びを伝える段階を越えて、さらにいろいろな角度からその興味を深めてほしい。

志田雅美さんの「ぼてたまご」は、驚きのエッセイである。作者は今でも4時間以上をかけて一つの卵を描き続けているのであろうか。これは、この学校の生徒が皆取り組む課題なのだろうか。それともこの作者がとくに強いこだわりと忍耐を持った生徒なのだろうか。卵以外のものを描くとうなるのだろうか。いつか野田弘志のような神々しいリアリズムの作風に到達するのだろうか。それにしても、「ぼてたまご」という題名といい、意図的に改行されて整えられた文章といい、作者のユーモアと余裕も感じられるような気がする異色の一作である。

田中百子さんの「舟越桂の世界」は、しっかりと調査した上で、対象とする作品について自分の観点から具体的に述べている。すなわち、課題（興味）の発見、調査、分析、描写、解釈という研究の基本ができており、その探究の成果を講えた。

田中伸明さんの「楽譜における『アート』性の問題について」。私は楽譜を読む知識があまりないので、「謎カノン」と呼ばれるもののどこが謎なのか、よく理解できていないのだが、本作品で楽譜の視覚的な面からの芸術性という珍しい視点にあえて挑み、調査した上で実例を挙げて述べている点を評価したい。

田村弥都さんの「STRANGE」では、「変」に徹してブレイクスルーしたという、その作品がどれほど「変」なのか、

ぜひ見てみたいという気持ちになった。読者をこのようなフラストレーションに陥れることも、作者の追究する「変」の一部なのかも知れない。

角田淑美さんの「G I F T A R T～ありっただけの気持ちを込めて～」からは、人に喜んでもらうために作りたい、という作者の立場がとてもよくわかる。読者の立場から、さらに望むとすれば、作品そのものについても語ってほしいと思う。人に喜んでほしいという「気持ち」が一番重要だが、気持ちだけでアートが成立するのではないはずだ。

津屋敬弥さんの「アートの素晴らしさ」。文章は淡々として、素朴にできごとを語っているようであるが、作者のご家族と本人のこれまで実際に行ってきたボランティア活動の重みには、ただ脱帽せざるを得ない。今後の成長をさらに期待したい。

中藤裕子さんの「白の巨匠」については、藤田の戦争画について述べた着眼点を評価したい。しかも戦争画のことだけに終始せず、限られた文字数にも関わらず、「白の巨匠」として藤田の仕事の全体観の中で評価しようとしている点にバランス感覚の良さを感じる。

中山綺華さんの「ヒューマン・アート・ヒューマン」では、人と「世界を共有する」というテーマのもと、一貫して制作の過程が語られる。思考の過程と、画面上の解決の進行が具体的に描写されていて、「人とつながりたい」という作者のビジョンに、思わず引き込まれて楽しんでるのに気づかされる。

西村美萌さんの「モノクロームの写真」は、答えの出にくい現代美術の作家の新しい展開に取り組んだ着眼点と挑戦の態度を高く評価したい。やなぎみわ作品であれば、さらに自由奔放に面白い解釈が出来る可能性があるだろう。今後も臆せず、様々なアートへの挑戦を続けてほしい。

野沢れいさんの「命」からは、いつかは消えて行く命の輝きを何かの形で人に伝えるのが

アーティストの役割であり、命そのものの役割でもあるというメッセージが、制作と展示のエピソードを通して伝わってくる。

林遼さんの「勇氣ある芸術家、ベルニーニ」。著者は、テレビ番組でベルニーニの作品に出会ったとのことだが、このエッセイは、まるでよく出来たテレビの解説のように、わかりやすく、一つ一つの作品の魅力を紹介してくれる。この、わかりやすく解説する、ということが実は難しく、高校生のエッセイでそれができているものは非常に少ない。著者は解説する才能をもった人なのかもしれない。

早藤優樹さんの「モノクロの世界を抜け出して」。この、書道をもっと練習して、人に何か伝えられる世界を表現したい、という前向きなメッセージがまっすぐに飛び込んでくるさわやかなエッセイ。読者の心まで洗われるようだ。図版として掲載した鮮やかなスカイブルーの中の「瞬」の文字が、視覚的にエッセイを支える上でも実に効果的だと思う。

深須砂里さんの「失いからの再出発」。固い木と格闘して彫刻を作り上げるのは、本当に困難な仕事だ。自分の殻を破り、一つの表現を成し遂げた作者の達成感がよく表現されている。

藤真知恵さんの「聖母と天使のひかりとひかり」については、克明に絵を描写する筆力を評価したい。高校生のエッセイでは、作品の具体的な描写を簡単に終わらせてしまうことが多く、考察の裏付けを弱めてしまう傾向があるが、この著者はその点を避けて念入りに描き出している。

山下真依さんの「苦痛による覚醒」は、高校生のエッセイでありがちな、自分の経験を交えて思い入れたっぷりに感激気味に語る、というのではなく、あくまでも作家と作品に忠実に読み解こうとしているところが潔い。現代作家としても注目されている松井冬子を取り上げ、苦痛や狂気や絶望といった悲観的なテーマにも恐れず切り込もうとする態度が高く評価できる。

29名への私からの賛辞は以上である。ところで、371編の応募をしてくれた挑戦者たちを通して私が夢見ていることは二つある。一つはこの中から将来の日本を代表するライターやアーティストが出現して、新しいアートの世界を見せてくれることだ。独創的なアーティストとともに、優れたライターや協力する人々のつながりが構築されてこそ、初めて新しい枠組みのアートが社会に根を下ろすことができるからだ。

「そんなことありえない。」という人には、次の言葉を贈りたい。「夢見ることから始めなければ、何も起こらない。」誰かがそれをやるだろう。それはあなたかも知れないし、別の誰かかも知れない。

もう一つは、将来、アートを専門とするとしないにかかわらず、より多くの人がそれぞれの立場で、アートについての自分なりの興味や意見を持ち続けてほしい、ということだ。

言い換えれば、自分の人生の中にアートの贈り物を保ち続けることだ。世界から尊敬される「芸術文化立国」を作り上げるのに、施設や公共予算や制度的支援や美術市場は不可欠だろうが、最も欠けてはならないものは、文化に対する深い理解をもった優れた市民を育てることだ。アトライター大賞は、次の世代の人々の心の中に、アートをしっかりと植えていく試みなのである。

大賞 きれない

坏 竜馬 大阪府立港南造形高等学校 2年

八月上旬、大阪市内の天王寺美術館で開催する、全大阪高等学校美術工芸展に絵画部門で出品するために、日々制作に励んでいました。

実際には、僕の右手はついています、それを切断したような表現の自画像（図1）を描いていた自分に、先生達は反対しました。

その頃、絵を描くことが、自分にとって非常に苦痛でした。ノートや色んな物にたくさん描いていたのですが、自分が何故絵を描いているか分からず、何を描きたいのかが分からず、目的のはっきりとしない自分の描いたもの達がひどく空虚に見えました。そんな時、僕は、例えば「切断」といった、痛みのある表現に持って行ってしまう事が多かったのです。

「君がそう思っていなくても傷付く人が出てくる。」

「絵を描く事が苦痛、という意思を表現する方法は他にもあるのではないか。」

と先生達は言います。

言われた時は納得するのですが、しばらくして考え出すと、

「人がどう思うかなんて、人それぞれなんじゃないか？」

と思ったりもしましたし、意地みたいなものがあった、そのまま描いてやろうと思っていました。

しかし、どうしても描いていくうちに、何ともいえない複雑な感情が湧き上がってきました。

「やっぱ傷つく人おるのかなあ。どう思うのかなあ。」と、悩む日々が続きました。

そして、結局、背景を抽象的な装飾で覆い、切断面の印象を弱めていきました。

そうしてさらに制作は進み、完成と言わざるを得ない日がやってきました。



図1 坏 竜馬 「ドナニー」
2009年 F100号

その時、自分の描こうとしていたものは、もうそこには無いように思え、残っていたものは、遠慮に遠慮を重ねた、なんとも中途半端なものにしか僕には見えませんでした。

確かに、他者の存在を軽視し、配慮もないようなものは、ただのひとりよがりの自己満足となってしまう事が多いと思います。他者を無視してのアートは成り立たないのだと思うのです。

アートとは、人が社会の中で生きていく中で、人との係わりを原点として生まれてくるものだと思います。

もし、僕がこの世に一人しか存在しなかったら、果たして絵を描き続けるでしょうか。

褒めてくれる人、批判してくれる人、感動する人、悲しむ人、何も感じない人すらいない。そうになると、自分は描くのをやめてしまうだろうと思います。

それは、自分が絵を描いているのは、決して自身の快樂のためだけではないからです。

社会の中で生きていくため、そして社会と闘うために絵を描いていこうとしているからです。

他者の心に、何らかの変化を起こすために創ろうとしているからです。

だから、アートにおいて、他者の存在は必要不可欠なものだと思うのです。

他人の意見を聞いて、それを自分の中で消化して作品に反映させる事も重要であり、それが間違っているとも思いません。しかし、あまりにもそれに流されてしまうのも良いとはいえません。

時には、ひとりよがりに近いような確固たる意志を持って臨まないと、この先必ず弾かれてしまうと思います。

自分には、この意志が欠如していると思います。

今回、あまりにも中途半端な精神で制作に取り組んでいました。

非常に反省していますが、後悔はしていません。

様々な事において、他者の存在の大切さを再認識する事ができたからです。

大賞

無常の起点—鴻池朋子展によせて—

岡崎 瀬波 New Zealand, Oxford Area School 3年

私は、私の心臓の音が嫌いだった。

世界に満ちあふれる美しい音、美しい静寂と、私の鼓動音は、決して協和をしないのだ。

たとえば絵画を見るとき、私は、しんとした静寂に包まれながら、絵画からにじみ出る音を、確かに聞き取りたいと思う。だけれど心臓は、いつでも体の深いところで鳴り続けている。鼓動する限り、この耳は不協和音しか聞き取れないのだ。その無常は、いつも私に哀しみを刻む。

その展覧会場に入る前も、私の心は水浸しだった。

鴻池朋子氏は、その独特の世界観から国内外を問わずに支持を得ている芸術家である。物語性のある作品を造り出す芸術家だとよく評論されていることから分かるように、彼女の作品は、それを見た者の想像力を、確かに刺激する。そして作家自身も、見る者の想像力を信じて作品を造り続けているように思うのだ。作家が私たちへと向ける信頼のようなものと、私たち現代人の、想像したいという欲求が共鳴した時、彼女の作品はより一層煌々。そして想像は、静けさに満ちた空間で、密やかに行ってこそ奥ゆかしさを増すものなのだろう。故に私は、会場の入り口を前にして、心切なさを感じるばかりだった。展覧会に抱く期待感を、心臓があまりにも正しく、反映していたからだ。

「鴻池朋子展 インタートラベラー 神話と遊ぶ人」と書かれたチケットをそっと握る。

インタートラベラー。これは地核への旅人という意味を持つ、鴻池氏の造語である。私たち観覧者は、旅人となって地球の中心へと向かうのだ。このコンセプトを聞くだけで、心は芸術に触れた時のような至福を感じる。鴻池氏の世界観が、コンセプトにさえ強烈に滲み出ていると感じるからだ。

一定の速度で鳴り続ける不協和音を身体に響かせながら、入り口を潜った。

旅が始まる。まず目にするのは、白い壁だ。白い壁に、青い言葉がぼつかりと浮かんでいる。死者と遊ぶ人と題された、作家本人の詩だ。

「ごはんを食べずに生きていけるとは、それは人ではない」

言葉を展示するという手法を用いた「作品」。その発想と、何よりもその言葉の意味に、全身の筋肉が力を失ってしまったような、脱力感を憶えた。死者と遊ぶ人。この最初の作品をもって、私は自分は死者であるのだと自覚させられたのだ。私にもあらゆる欲求がある。だけれど、旅を始めた私の中に渦巻いていた欲求はすべて、生きるために必要不可欠なものでは、決してなかった。

死者だと自覚をした後に、地球の心臓部へと向かうのは、どのような意味があるのだろうか、考えながら、旅を続ける。

真っ赤に染め上げられた部屋を潜り、骸骨や、人間の足の生えた狼や蝶の描かれた、襖の部屋を後にする。徐々に暗く、狭くなってゆく道を歩む。道中にはあらゆる言葉が展示

されており、それらは地核に近づく度に謎めいてゆく。

長い旅をしていた。数多の作品と対話をしながらの旅なのだから、それも当然だったのかもしれない。

目的地である地核を前にして、わたしは、旅の終わる切なさを感じていた。

地球の中心に足を踏み入れる時、旅の始まりに抱いた疑問を思い出していた。死者が、地球の心臓を目指すのには、どのような意味があるのか。

地核に足を踏み入れる。

ああ。あの感情に、似合いの名はあるのだろうか。あの瞬間に湧き上がった、あの圧倒的なまでの感情に、付けるべき正しい名前は、この世界に存在するのだろうか。どんな感情さえも超越して、ただ涙だけがはらはらと落ちてゆく、あの感覚を、私は形容さえできない。

——そこには、光りがあった。

暗い空間の中心で、硝子張りの赤ん坊の頭部が、光りを乱反射し、闇を照らしあげている。

赤ん坊は静かに回りながら、世界の、遠いところをじっと見つめている。赤ん坊には左目がなく、その完全ではない頭を懸命に動かしながら、一身に世界の光りを浴びている。美しいと思った。まぶしさを感じた。

ずっと、人の一生はただ儚いものだと思っていた。世界の音を正しく聞き取れないまま

の一生は無常だと思っていた。鼓動の音を嫌う自分が、きらいだった。

赤ん坊を前にして、涙が止まらなかったのは、きっと、産声が聞こえたからだ。みずみずしい赤子の声が、すばらしく鮮明に、鮮烈に聞こえてくる。

心の臓が、生まれたての音を奏でていた。赤ん坊の光りに協和して、打ち震えるようにして泣いていた。

無常の起点が美しいものであったのならば、それはどんなに幸せなことだろう。無常の起点に、光りがあるのなら、それをきくと、私は希望と呼ぶだろう。生命の起点を、そこにある希望を、知ってしまったあの時、私は鼓動に愛おしさだけをただ感じていた。

死者が地球の中心を目指すのは、希望を欲するからなのかもしれない。生者も死者も、きっと生き物は、光りを目指し鼓動しているのだろう。

死者を光りへと導いた鴻池朋子氏の想像力に、私は感謝を伝えたい。

芸術の生命力に、生命力の芸術に励まされながら、私は今生きている。

(画像参照元：<http://www.operacity.jp/ag/exh108/>)

大賞

大きなブランコと小さな私

木下 遙 滋賀県立膳所高等学校 1年

絵は作者の心を写す、とよく言う。

でも私はそれを認めていなかった。

小学校2年生の図画工作の時間、「楽しいとき」をテーマに絵を描きなさい、と言われて、運動場のブランコで友達と私が一緒に遊んでいる様子を描いた。早く描き上がったのでその絵を友達に見せると、皆上手だと褒めてくれ、嬉しくなって先生に見せに行くと、その絵を見た先生が言った。

「もっと大きく描きなさい。」

私は、先生が言った言葉の意味がわからなかった。何故なら、私はもう既に大きく描いたつもりでいたから。画用紙いっぱい、ブランコと、私と友達の笑顔を描いたつもりだった。

もうこれ以上は大きく描けない。そう思って絵を直さずに授業の終わりを待っていると、先生が私の席に来てまた言った。

「ブランコ、普通このくらい、大きいやんか。」

そう言って先生は私のクレヨンを持って、私が描いた上から勝手に線を描き足してしまった。人間の方は流石に直しようがないと思ったのか、先生はブランコだけ直すと教卓に戻って行ったが、先生が描き直したブランコに乗る「私」は異様に小さく見えて、その絵はひどく不格好だった。

丁度授業の終わりのチャイムが鳴り、私は勝手に絵を直されたことが悲しかったが、涙をこらえたままその絵を先生に提出した。

やがて2年生も終わる頃になって、先生が採点を終えて学校に置いてあった作品も、家

に持って帰ることになった。もちろん不格好なブランコの絵も、再び私の元へ返ってきた。私はその絵を見るとなんだか嫌な気分になって、こんな絵両親に見られる前にと、その絵を破いて捨てた。

そんなことが何度もあった。勝手に絵に描き足される、というのは、そんなことをするあの先生がかなり特殊だったらしく、二度と経験することはなかったが、絵を描けば批難的な意味でなくても「小さすぎる」「色が薄い」とよく言われた。

今思えば、幼稚園の頃から私が描いた絵は大人しい絵が多かったように思う。他の子たちが元気で明るい大胆な絵を描いていても、私ひとり淡い色合いで大人しい感じの絵だった。

「絵は作者の心を写す」と言うのなら、私の心は絵と同じように大人しく静かなのだろうか。否、違う、本当はそうじゃない。私だって皆と同じような、明るく快活な心を持っているのに。

いつからか、大好きだった絵を描くことが、コンプレックスに変わった。私の描いた絵を見た友達が、「あなたらしいね」という度、もどかしくなり、私は大きく、明るく、派手な絵ばかりを、無理に意識して描くようになった。そうして描く絵に煮え切らない思いを抱えながら、私は中学生になった。

中学3年生の美術の時間、「紙で抽象画を描く」という授業があった。鉛筆で下書きをして、その上から色んな種類の紙を張り付けてひとつの絵にする、といった内容で、私は



(図1) 木下 遥《時》
2008年 紙

初め、いつものように絵を無理やり華やかにしようとしていた。その頃にはもう、それがすっかり癖になってしまっていた。

しかし、なかなか良いデザインが浮かばず、困って周りのクラスメイトを見ると、クラスの殆どが皆似たような絵を描いていることに気づいた。皆、慣れない抽象画に戸惑って、先生が例に示した作品をそろって真似ているようだった。

その時私は、ずっと忘れていた、大好きな絵を描くことに対する思いを自分の中に感じた。

「自分だけの絵が描きたい！」

そう思ってから作業は驚くほど速く進んだ。自分が「こうしたい」と思うままに絵を描き、紙を選び、張り付けた。「大きくしなきゃ」だとか、そんなことは一切考えずに。

そうして出来上がった作品は、淡い色合いの、静かな絵だった(図1)。

私が無理に明るい絵ばかりを描いていたとき、本当はもっと明るい自分になりたかっただけなのかもしれない。意識して描いた明るい絵は、どこか納得のいかないものばかりだった。そして、自分の気持ちに正直に描いた絵は、こんなにもこころにしっくりとくる。私は本当の気持ちを偽ってばかりで、いつかの大きなブランコと、それに乗る小さな私のように、不格好だった。

私は、描きたい絵にも、自分自身にも、嘘をつくことをやめた。

絵は作者の心を写す。その言葉に妙に納得させられた。

私は、ようやく大きなブランコから降りた。

大賞

文化祭ポスター制作記

三文字 昌也 東京都 筑波大学附属駒場高等学校 2年

刻。きざみ。

僕たちの文化祭を人に伝えるということが僕の仕事だった。B2のツルツルのコート紙に、僕たちの文化祭を詰め込むという仕事はとても難しいとは分かっていたのだが、それでも私の好きなようにできるというのは楽しみだった。そして、全校の生徒が選んだ「刻」の旗印のもと、僕たちの文化祭は始まった。言葉だったら話は簡単だ。「刻」というテーマについて、分かったような分からないようなキザなことがいくらかでも書ける。しかし、ポスターだとそうはいかない。曖昧なものは、目に飛び込んでこない。

刻、ってなんだろう。

このスローガンに込められた意味は、どれも抽象的だった。

——時を、刻む。

流れゆく時の中で、僕たちはがむしゃらに、時の流れに歯向かう。何か僕たちがここにいたという痕跡を刻もうとして。

——心に、刻む。

ただひとつ、心の中にずっと刻まれる記憶ができてほしい。

時を刻む、だとか、心に刻む、だとか、色も形も持たず見ることでできないものを、どうやってポスターに表せと言うのか、私には見当がつかなかった。

最初に仕方がなく、「時を刻む」に挑戦した。時をどうやって表せばいいのか、まったく閃きが起きない。

時を刻む、と聞いて頭に浮かんだのは、やはり時計しかなかった。ダリの『記憶の固執』などの作品にも出てくるが、やはり「時」の象徴と言え、単純に時計。これ以外にはない。

時の流れに歯向かうことが「刻」だとすれば、時の流れに抵抗しているということを視覚化しなきゃいけない。となると、時計を破壊すればいいんじゃないだろうか。



当初、僕の心の中に渦巻いていた「刻」は、これだった。刹那的、そして非常にもろい、まさに「一瞬」である文化祭。一瞬で壊れ過ぎ去っていく文化祭だけど、非常に美しい、というような。

しかし、こういう刹那的な「刻」を思っていたのは僕だけだったようで、どうにもこうにも暗いイメージが先行するということで却下されていった。

刻む。刻み込む。

いろいろ考えた。が、貧困な発想力からは何も出てこなかった。

結局、ポスターに複雑な意味を込めることを断念して、ただ、刻という言葉伝えてみることにした。

そう思って最初に考えたのは、りんご。真っ先に浮かんだ、いわゆる「刻むもの」だった。それは、まな板の上のりんごであった。

ポスターみたいにしてみた。



この、ひねりのないダイレクトさ、そしてそこからくるインパクトが、僕はなぜだか好きだった。

多分、「刻」という文字を伝えたいなら、作ったポスターの中で最高の出来映えだった。でも、なんの意味も伝わらないし、見た人も「刻」の文字以上の想像はしてくれない。

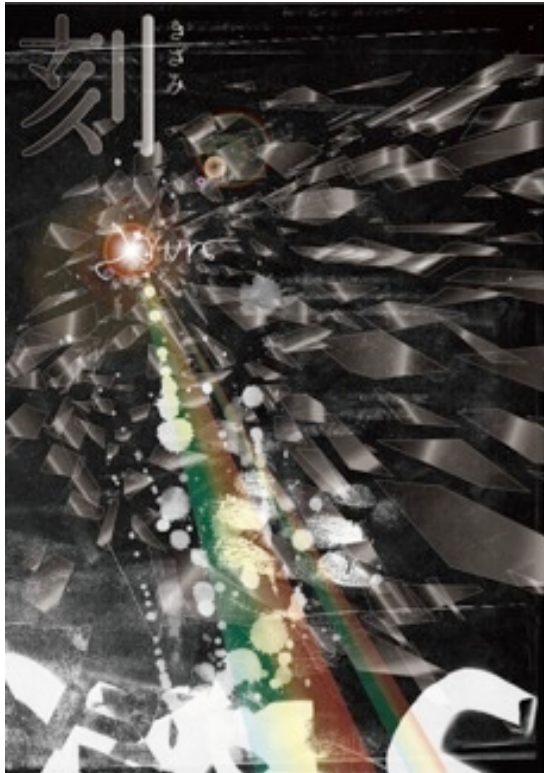
当然というべきか、笑いの種以上のなものにもなれなかったのだが。

単純に、刻まれるものとしてもう1つ思いついたのは、ガラス。

ピカピカ透き通る美しい素材、刻まれてバラバラになってこそ、華やかに光を反射する素材として、ぜひともポスターに使いたかった。

僕の中で、ガラスは記憶を連想させる。綺麗だけど壊れやすい、ガラスと記憶は似ている気がしていた。心に刻む文化祭ならば、私にはガラスがふさわしいと思えたのだった。

デュシャンの作品の中にも、ガラスを使った不思議な作品があったと思うが、ヒビが入っていたはずだ。あれが、「刻」なのではないかと思った。埃で汚され、ヒビが入ったガラス。イメージの底にあったのは、新品のガラスではなくてデュシャンの大ガラスの方だったのかもしれない。



作ってみて、綺麗だと自分で思った。

しかし、なんだかつまらないな、とそう感じた。いろいろいじってみても、パツとするものが全然できなかった。

それから、いろいろ考えた。

なぜだか、どうしてもりんごが頭から離れなかった。りんごの持つ斬新さに惹かれただけだったのだろうか。

りんごから連想したのは、マグリットだった。そして、マグリットと言えば、空。

僕は、遊びで、こんなものを作ってみた。



渋谷の街に、いきなりりんごが降ってきたら、行き交う人は、何を感じるだろう。

そう考えたときに、別の発想が生まれた。

渋谷の「街」がいきなり刻まれたら、行き交う人々は何を思うだろう。

そうだ。街を、刻もう。そう思った。

街は人間社会の象徴と言われる。人は、街で時の流れをやり過ごし、街でいろんな記憶を創り出している。その街自体を、僕たちが刻もう。

時を刻み、心に刻む。街を刻むことで、表せたんじゃないだろうか？

そう考えると、なんだかピンと来るものがあった。現実的には、締め切りも近かったし、慌てた末の錯覚だったかもしれないけれど、とにかくやってみることにした。

僕たちは、写真を撮りに渋谷の街に繰り出した。

そして。渋谷を刻んで、



ポスターは、こういう形で完成した。

特別賞

美しさを語る。

久志本 彩花 静岡県 浜松学芸高等学校 2年

たくさんの目が、私と作品をとらえている。足はがくがくと震え、声の音量も自分では分からない。

美術の美しさを語るのは難しい。それも、価値観が違う見ず知らずの他人に伝えるなら尚更だ。夏を間近に控えたその日、私は、その難しさを実感することとなった。

その知らせが来たのは、私が油絵専攻の授業に慣れ始めた5月だった。

静岡県立美術館にて、高校生のギャラリートークを募集するという。本来なら学芸員の方や、もしくは企画として画家自身が行うことが多い。それを高校生が実際に行うというのは新鮮で、めったにない機会に思われた。

私は即座に参加することを決めた。

六月の初め、実際の作品を見てのミーティングが行われた。

私を含めた参加者は皆、話し合う前に、学芸員の方が行うギャラリートークを見学した。

今回の展示会は、「体で感じるアート展」と題し、美術館に所蔵されている作品を6つのワールドに分け、見るだけではなく実際に体感することで、大人から子供まで楽しめるようになっている。

学芸員の方は、笑顔で、はきはきと分かりやすく説明していた。時折お客様に問いかけてコミュニケーションを取りながら、作品の美しさ、楽しさを語っている。

私は、その姿に魅了されると同時に、足がすくむのが分かった。

例えば、そこに一輪の花があるとする。その花を、美しいと言うのは誰だって簡単に出来るだろう。そうではなく、自分は何処が美しいと思ったのか、何に魅了されたのかを、周りにいる人々へ伝えるのだ。

人それぞれ価値観が違うのだから、皆が皆美しいと感じる部分と同じとは限らない。私にはせいぜい、「美しい」の三文字を少し具体的に言うのが精一杯といったところだろう。

しかし、学芸員の方は自分が感じた美しさに加え、その花の種類、生い立ち、季節や環境を理解した上で、語るのだ。人々は納得し、話を聞くことに楽しさを覚える。

その花のデータを調べることは簡単に出来るが、それを分かりやすく、かつ自分の感じた美しさを織り交ぜていかねばならないのだ。花を実際の作品に見立て、私はお客様の目の前で語る事が出来るのだろうか。

さてギャラリートーク終了後のミーティングで、私は友人と共に最初のアクションワールドを担当することになった。アクションワールドはスピードのある、面白い描写制作のなされた3作品が集まっている。このおもしろさを、どうやって語ればいいのか。

私が一番心ひかれたのは、白髪一雄さんの「屋島」だった。絵の具が乗ったキャンバスを床に寝かせ、天井からぶらさがったロープ

に捕まって足で直に描いたのだという。筆では表現できない豪快さ、迫力がある作品だ。

このおもしろさを、どうやって伝えればいいのか。私と友人は同じタイミングで、そのアイデアを口にした。

「そうだ、実際に私たちもやってみればいい。」

学芸員のように上手に語れないかもしれないが、実体験があればおもしろくなるかもしれない。

早速私はキャンバスと赤の油絵の具を購入し、学校で実践した。絵の具だけで行ったため、結局本番には乾かなかった。仕方なく撮った写真を大きく印刷し、代用することにした。

本番当日。今日ここに来るお客様は、私達がギャラリートークを行うことをほとんど知らない。

最初の担当である私達次第で、この企画は成功したかどうかが決まる。

私は改めて気を引き締めた。チャンスは2回。失敗は、許されない。

いよいよ1回目のギャラリートークが始まった。子供から大人まで幅広く、人数も多かった。私は必死で語るのだが、内容、音量と共に私の感じる美しさがお客様に上手く伝えることが出来ない。違う、もっと語りたいたいこと、語らなければいけないことがあるのに。

どうすれば良いのだろう。終始焦ったまま、私の出番は終わった。

悔しい。なんて、なんて難しいのだろう。ただここが美しいと伝えるだけなのに、上手く言葉にすることが出来ない。後少しで2回目が始まる。私は、体中に何か熱いものが流れるのを感じた。今度こそ強く伝えなくては。そう思った。

そして、2回目。たくさんの目が、私と作品をとらえている。足はがくがくと震え、声の音量も自分では分からない。

それでも私は、夢中で口を動かした。代用写真を見せ、失敗談を交えながら、作品の奥深さを語る。

心から楽しい、と思えた。

そして、私は無事終わることが出来た。1回目の時よりも達成感に包まれ、とても穏やかな気持ちだった。私はやっと、私の感じる美しさを語る事が出来たのだ。

美しさを言語化し、語るのは難しい。

それを聞いて、私と同じように美しいと感じる人がいる一方で、正反対の部分を感じると感じる人もいるだろう。だから、分かってもらうことではなく、誰かに伝えるということが大事なのだろう。そして、伝え合っていくことで、もしかしたら新たな美しさを感じることも出来るかも知れない。

ギャラリートークで、私はそう学んだ。

優秀賞

墨の声を聞け

荒木 絵理 北海道立大樹高等学校 1年

書道をするとき、線の長さ、太さ、うねり、呼吸、かすれ、立体感などはわたしが表現していると思っていた。

だけど、本当にそうだろうか。

書道には墨が欠かせない。筆に墨をつけ、紙に書いていく。

わたしは反対にこの墨自体が、自ら集合し、呼応し、共鳴して、自分たちを文字として表現しているのかもしれないと想像してみた。

彼らはちょうど、となりのトトロにでてきたあのまっくろくろすけたちのように意志を持ち、丸く、小さく、あるいは目に見えないくらい極小の状態で紙の上をふよふよしており、何かの拍子にぞぞぞっと集まって来てひとつの文字となるのだ。

この突拍子もない考えを持つきっかけとなったのは、ある作品だった。それは町の文化祭のために書いた「無」。

大きく長い紙に一文字、無と書かれているだけのものだった。

それはわたしにとって初めての創作でもあった。

印象的な線を出したい。その一心で筆を動かした。だけれども、自分の思いどおりの線

は全くといっていいほど出せないのである。

枚数を重ねていっても、文字はハリボテのように安っぽかった。ここにかすれが欲しい。もっと繊細な表現がしたい。などというわたしの気持ちをいくら筆に伝えたところで、文字の方はお構いなしなのだ。

何枚書いても、そんな状態が続いた。もう嫌になって本当に逃げたしなくなった。何でうまくいかないのか、どうして自分の思うように書けないのか。何もかもが分からなかった。

この時はまだ、一番大切なことに気がついていなかったのだ。

いったい何枚目だったのだろう。その自分が書いた右上がりの横線を見たとき、わたしは妙な感覚に襲われた。まったく予想もしていなかった線が、いきなり目の前に現れたのである。



「無」135×75
紙・濃墨

それは、見たことがないかすれだった。

その後も何枚も書いたのだが、その線は二度と姿を見せなかった。

悩んだが、その線に妙な説得力があるような気がしてそれを出品したのだった。というより、他の候補には全くといっていいほど心が響かなかったので、一見失敗作のようにも思えるその一枚を選ばざるを得なかったのである。

この作品のおかげでようやく気づくことができた。

初めから、思いどおりに書く必要なんて無かった。

振り返ってみれば、今までの自分はむやみらたらに筆を動かし、思いどおりに書けないことに苛立ち、墨たちの意志とは常にすれ違っていたような気がした。

わたしは、もっと墨たちの、線たちの、ひとつひとつの声に耳を傾けるべきだったのだ。

今までの自分を責めた。

そして今度はどんな声を聞かせてくれるのだろうか。絶え間なく変化し続ける墨たちの心をとらえようともがいてきた。

今では、すべての線は偶然に、刹那的に、あるいは二度と起きることのない奇跡のようにわたしを楽しませてくれるように思える。

わたしが書いている訳ではない。墨によって書かせてもらっているのだ。

しかし、わたしはここで満足したくない。いつか筆を使って、墨にこちら側から語りかけられるような技術を身につけたいと思う。そして、まっくろくろすけたちがその声を聞いてくれたとき、目に見えはしない大事な何かを手に行けると信じている。

優秀賞 『生』

石丸 夏海 福井県立高志高等学校 2年

木々に挟まれた上り坂を車で走り抜けると、豊かな緑に囲まれた高台に、目指す美術館がぽっかりと建っていた。青いタイルがきらきらと光って、風が海から吹き上がってくる。それだけで1つの作品のようで、思わず引き込まれた。

小野忠弘氏は日本のジャンクアートの先駆けであり、廃品をキャンバスに貼り付けた作品で知られる芸術家であった。死後、自宅に隣接した小さな美術館ができ、週末だけ公開されている。

中に入ると、今まで見たことのない全く新しい世界が私たちを待っていた。小野氏の人間性と強いメッセージが伝わってきて圧倒され、同時に少しずつ肩の力が抜けていくのを感じた。難しく考えないで、自分たちの伝えたいことを自由に作ればいいのだと、小野氏の作品は私たちに語りかけてくれているようだった。

そもそも私たちは、現代アートというものがどういうものかさえ、知らなかった。美術部顧問の先生から現代アートのコンクールに出品を勧められたときも、何を作ったらいいのか全くイメージできなかった。それでも4人の仲間と共同制作を決め、意気込んでみたものの、前にはなかなか進めずにいた。コンクールの会場となる坂井市三国町の美術館へ足を運んだのは、そんな頃のことである。

三国から戻り改めて相談すると、行く前よりも遥かにスムーズに話し合いは進んだ。そのうちに「意外性」、「三国の自然」そして「私達の今」というテーマが出てきた。最終的にこの3つのテーマは1つのイメージにまとまった。それは、美術館の周りの自然と絡めて、人工の「木」を美術館の中に生やしてみるというものだった。空間が限られている方が作りやすいだろうということで、小野氏の自宅の風呂場を展示場所に決めた。素材は、4人でしか集められないもの、16歳の今だからこそ意味を持つものにした。今まで生きてきたそれぞれの思い出の品をたくさん集めた。古い教科書やノート、絵本、ランドセル、幼い頃の洋服、お気に入りだった帽子やくつ、いつも遊んでいたおもちゃやぬいぐるみ、思い出の写真……。見ているだけで様々な思い出が蘇ってきて、懐かしくなった。友だちの意外な一面を物語るものもあった。私たちの16年間のシンボルが、1本の木として姿を現し始めたようで、それだけでわくわくした気持ちになった。

それでも不安が全て拭われたわけではなかった。何を使ってどう作るかは決まったが、具体的な完成形はまだ想像できなかった。自分たちの作るものはきちんと形になるのだろうか。小野氏の作品のように見る人に強く訴えかけるようなものに仕上がるのだろうか。そんな不安は私の胸につかえたままだった。しかし実際に作り始めると、そんな

心配は無用だった。木は自分の意志を持ったようにどんどん成長していった。恐る恐る始めた作業がどんどん楽しくなって、次々と浮かぶイメージに手を動かすのが追いつかないほどだった。木が成長するたびに、頭に思い描いた完成図は変わっていった。気づくとその完成図も頭の中から消えていて、4人の手は驚くほど自由に動いていた。作っている自分たちも次にどうなるか分からなかった。計画性なんてどこにもなくて、でもそれが何よりも魅力的で、楽しかった。風呂場の中は蒸すように暑かったけれど、それも気にならなかった。物心つく前から絵が大好きで、中学でも美術部に入っていたが、こんなに夢中になった制作は初めてだった。ふと手を止めて「木」を眺めると、本当に外の緑に負けないほど生き生きとして見えた。自分たちが大切にしてきたものが1つの形に溶けあっている。たくさんの思い出を抱えてなお堂々と立つ木の姿に、自分たちが重なり、自信を持ってこの作品を出品することができると思った。

そんな思いもあって、私たちは、この作品のタイトルを『生』と名づけた。初めて取り組んだ現代アートだったが、今の自分たちを全て込めることができた気がした。だから、新聞で「小野忠弘賞」の受賞を知ったときは、本当に嬉しかった。出品者のほとんどが上級生であっただけに、驚きでいっぱいだった。表彰式の後の会場では、私たちの作品に



興味を持ってくださった多くの方々から、いろいろな言葉をいただいた。ようやく実感が増すと同時に、やって良かったと心から感じた。

4人で励まし合い、笑い合いながら1つの作品を作り上げたあの夏の経験は、きっと私達の1番の宝物になった。私たちのあの『生』は解体してしまい、今は残念ながら姿がない。それでも強い力を秘めながら私たちの心の中に今も立っている。私たちの心の中の『生』は、枝葉を伸ばしながら、これからもずっと成長していくだろう。

優秀賞 一期一会

市下 純子 熊本県立第二高等学校 2年

何と言いませばいいのでしょうか。こんなにも泣きたくなるような、微笑みたくなるような、そんな絵に私は今まで出会ったことがありませんでした。『母Ⅱ』これがその作品の題名です。作者の名前は残念ながら覚えていません。

私がある絵に出会ったのは夏が通り過ぎようとし、秋の気配が近づき始めていた一年前の九月。県の美術展を見に、母と二人で県立美術館に足を運んだ日のことです。数多く展示してある作品を一巡した後、改めて印象に残った作品をじっくり見ようと思ひ私は足を進めていました。しかし、一つ目のフロアを見、二つ目のフロアを見始めると、今まで足早に動かしていた足が自然と止まってしまったのです。一目見て、すぐに釘付けになりました。その絵に。

『母Ⅱ』を見た時にまず目に飛び込んできたのは、頬杖をつき、何かにか優しく微笑みかけているおばあさんの顔でした。画面いっぱいに描かれたしわだらけの顔と手、優しい目線に何ともいえない気持ちになりました。全体的にセピアがかかった色合いは優しい雰囲気を出していました。その目線は何かを思ひ出しているようにも、遠くを見つめているようにも見えました。

この絵からは作者の母への愛がとても強く感じられました。特に、目元はそこに生きて

いる生身の人間がいるかのような輝きを放っており、まさに生きているように見えました。その目の優しさといったら、まるで孫や子の成長を喜んで見守っているかのような、昔の思ひ出を振り返っているかのような、そんな感じが伝わってきました。

そんな絵を見て、私は亡き祖父を思ひ出しました。『母Ⅱ』を見ていると祖父との思ひ出が一つ、また一つと浮かんできたのです。この絵は私にか懐かしい思ひ出を思ひ出させてくれました。それはおばあさんの目が私の祖父と重複して見えたからだと思います。そしてふと思ったのです。

この絵を見て私が感じたことは十六年間生きてきた中での出来事だ、と。だとするとともに幼い頃の自分は、成長した自分は、この絵を見てどう思ひのだろうか、自分以外の人はどう思ひのだろうか。つまり、年齢や性別、今までの経験によって一枚の絵でも感じることは人様々だと思ひ至ったのです。

人生は十人十色です。誰一人として同じ人生など歩いていません。それぞれ違った経験をしているのです。私にとって『母Ⅱ』という絵を見た時に思ひ出されたのは6歳のときに無くなった祖父でした。それは私が幼い頃に大切な人を亡くした。その祖父がとてもいい人で大好きだった、という経験や思ひ入れがあるからではないのでしょうか。そしてこ

これは今、16歳の高校生の私が思ったことです。もっと幼かったら誰かを思い出して懐かしむ、というところまで考えつかなかったかもしれません。もっと大人だったら、例えば母や父くらいの年齢になったときに見たならば、今よりもいろんな経験を重ねたことで祖父を思い出しはしないかもしれません。この絵にまた違った感動を覚えるかもしれません。きっと、私以外の誰かがこの絵を見たら、考えることは違うことでしょう。誰かを思い出すわけじゃないかもしれないし、この絵にどんな感情を持つかも分かりません。

私は『母Ⅱ』に出合って、感動という言葉だけでは足りない思いを感じました。そして、この絵に出会ってからの制作では、見た人にも私の懐かしんだ一部や感動した一部を感じてほしいと思い始めました。それは『母Ⅱ』から作者の強い思いを感じたからです。そしてそれに私が感化されたからです。

私の制作する作品たちはすべてどこか子どもっぽさを表しています。幼稚であるわけではなく、作品の内容が子ども時代に繋がっているものが多いのです。それは成長していくにつれて、子どもの頃の無邪気だった時の記憶を忘れるということが、私自身嫌だと思っているからだと思います。そして、他の人に



市下純子《むかしはみんなこどもだった》
F50号・油彩、2009年

もそういう子ども時代があったのだということも忘れて欲しくないという想いがあるからです。こういう想いを作品に込められるようになったのはその絵に出会えたからでしょう。

教科書に載るような、どんなに有名な作家の作品よりも私は『母Ⅱ』に心を揺さぶられました。自分の作品に対しての向き合い方や、価値観にまで影響を与えられる絵に会えるなんて、驚き以外の言葉が思いつきません。人との出会いは一期一会だと言います。美術作品との出会いも一期一会ではないでしょうか。私は一年の時を経てそう考えるようになりました。

優秀賞

小さなゴジラはわたしの魂 ～一塊の土に宿ったいのち～

大久保 友香 滋賀県立膳所高等学校 1年

昔から、粘土作品は得意だった。幼稚園の頃に作った粘土の動物園や小学校で作った夢の楽園、躍動する人間など、自慢では無いが私が作った粘土作品はいつも賞をもらった。周りの大人たちは「すごいなあ」「上手やなあ」と私を褒めた。しかし、それらの作品はどれも先生にこうしなさい、ああしなさい、といわれて作ったもので、別に私が特別な思いを込めて作ったとか、必死に構想を練ったというわけではなかった。だから賞をもらって周りの大人たちに褒めてもらってもそこまで嬉しくは無かったし、むしろ当の本人である私としては「これのどこがいいの？」という感じだった。今はもうその作品を作ったという事実しか思い出せず、それらがどんなものだったかという面影すら残っていない。「コレ、残しておこうか」と嬉しそうに作品を箱にしまう母親の笑顔は思い出せるのに、肝心の「コレ」は私の記憶から抜け落ちていたのだ。

小学校3年生のとき、また図工の授業で粘土作品を作る機会がやってきた。今回は重い土粘土で、実在しない生き物を作るのだそう。それはドラゴンであったりユニコーンであったり、または自分で一から創り出した生き物でもいい。粘土作品作り自体はなかなか好きだったので、私は鉛筆を握ると、どんどん構想を練り始めた。どうせなら、いつも作るような可愛らしい色とりどりの紙粘土の作

品とは違った、強くてカッコイイ生き物がいいと思った。そこで私は、以前年の近い兄が夢中になっていたゴジラのような大きな怪獣を思い浮かべた。そう、これしかない。そう思うや否や私の右手は滑り出した。どんなポーズにしようか、サイズはどのくらいにしようか。あつという間に下書きを半分完成させたとき、先生が見回りにきた。先生はにこにこしながらみんなの下書きを見回している。私が得意げな表情で下書きを見せると、先生は目を丸くして立ち止まった。「友香ちゃん、いつもと感じが違うなあ。」私は先生にこれを描くまでの経緯を説明した。けれど、それを聞いた先生の笑顔は気持ちのいいものではなく、どちらかといえば苦笑いだった。「うーん、それもええけど…。やっぱ自分だけの夢の生き物やから、もっと友香ちゃんらしい可愛らしくてオリジナルなものの方がええんちゃう。もう一回描いてみたら。」少し寂しい気分になったけれど、先生がそういうなら仕方が無い。私は今までに作った作品を思い出し、先生いわく「友香ちゃんらしい」「可愛らしい」生き物を創ろうと試みた。耳がお花になっているウサギ、空を飛ぶ猫、羽の生えたイルカ…。いくつか候補を作ってみると、先生は「いいやん、いいやん！」と満面の笑みを浮かべた。先生と相談した結果、羽の生えたイルカをすることになった。下書きの紙に先生のOKの判子

をもらい、いよいよ粘土に触る。重く冷たい土粘土を手にとり、丁寧に丸め、伸ばし、形を作る。誰よりも早く作品作りは進んだ。先生はそんな私を見て「さすがやな」と笑いかけた。けれど私は、最初に描いたあの怪獣が忘れられなかった。顎を高く上げて、今にも雄たけびを上げそうな大迫力の怪獣。粘土板の上に浮かび上がるビジョンは夢のようなイルカではなく、力強いゴジラだった。

そんなもやもやを抱えながら作品作りを続けたある日、先生が欠勤されたため図工の時間は自習になった。隣のクラスの先生が時々様子を見に来たけれど、粘土をボールにして投げ合う男子をしかるだけで、作品については何も言わない。みんな黙々と自分の作業に取り組んだ。私はひたすら粘土を丸めた。しかし、それ以上何も作る気がしない。というか、作れる気がしない。私は粘土を放り出すと、大きなため息をついた。「やっぱり、あの怪獣を作りたい。でも先生はイルカが良いといった……。どうせなら作りたいものを……。けど賞がもらえなかったらお母さんは悲しむかも……。でも、でも。」優等生の真面目ちゃんに通していた私は、散々迷った結果、初めて先生に抵抗することを決めた。

作品の提出日になった。先生の目の前に並ぶ夢のような生き物たち。その中で一際目立つ、いかにも野蛮そうな、場違いな怪獣。先生は「そんなにつくりたかったん。」と苦笑

すると、私の頭をそっと撫でた。私はそれでも満足だった。私にとってはそのゴジラがほかのどの作品よりも輝いて見えたのだ。

結局500gの土のゴジラが賞をもらうことは無かった。土粘土は何度も使うものだから、教室での展示が終わった後すぐに取り壊してしまっただけで、写真だって残っていない。けれど私は、まだそのゴジラをはっきりと思いつける。力強い下半身、大きくそれた喉元から大きな牙の生えた口に達するまで、すべて鮮明に。最近になってからこの話をする時、いつもお母さんは大笑いする。「あんたらしくていいんちゃう、そういうのも。」

今までに作った粘土作品の中で、唯一賞をもらわなかった大怪獣。みんなは「このときは残念だったね」と言うけれど、私はそうは思わない。だって、賞はもらえなかったって、私の中の特別な思いを込めた特別な怪獣であることに変わりはないのだから。私らしさを探求した結果なのだから。

高校生になった私は、もうほとんど粘土に触る機会が無いし、触りたいとも思わない。でもはじめて自分の意思で粘土作品を創り出したこの思い出は、一生忘れたくないと思っている。

優秀賞 伝える

大澤 夏実 滋賀県立膳所高等学校 2年

高校1年生の私は美術班員として学生主催の展覧会のために、油絵を描くことにした。その展覧会はMOKAZEMIHといって滋賀県の5つの高校の美術部員が中心となって開催するものである。2009年の3月末に3日間にわたって開催された。その展覧会に出品するのは私にとって3枚目の油絵（図A）だった。2枚目の油絵は石膏像を描いたのだが、想像の世界も描きたかった。しかし、まだ油絵2枚目の作品であり、想像では描き込む力が相当求められる、ということで断念したのだった。今回こそは、と言う気持ちでわたしは想像の世界、現実にはあり得ない絵を描こうと意気込んだ。

その時わたしの中にあつた想像の世界の一つは“夢十夜 第一夜”だった。夏目漱石による『夢十夜』の第一篇である。簡単に言うと、男が死んだ女の言葉を信じて女を待つ、という話だ。思いだすだけであの世界に飛び込んでいけるような気がする。不思議な話、神秘的な話…そうではあるのだが、それだけでは無い。不思議、とか神秘的、とかの枠組みを全て超越するかのような話だ。言葉でできている話ではあるが、その世界を、言葉を使って枠組みの中に入れようとするなんて無謀だと思わせる。言葉で表現しようとするほど遠ざかっていく気がする。

だから、絵を描いた。

その言葉に出来ない世界を絵で表現することは出来ないだろうかと思ったのだ。

『百年待っていて下さい』
と告げて亡くなった女を男は待った。
何度日が昇り、沈んだことか。
女の言葉を少しも疑わずに男は待った。
女の墓石にどれだけの苔が生えたことか。

疑ってしまった。

男は、自分は女にだまされたのではなかろうかと思いだした。

女は、会いに来た。

真っ白な百合に姿を変えて、男に会いに来た。

男は冷たい露の滴る白い花びらに接吻した。

“「百年はもう来ていたんだな。」とこのとき初めて気づいた。”

この一文で話は終わる。男の行方も、女の行方も分からない。高校一年の9月、現代国語の授業でこの話を取り扱ったとき先生が「この話はハッピーエンドだと思いますか。それともバッドエンドだと思いますか」と生徒たちに質問した。結果はほぼ五分五分だった。どこのクラスでもそのような状態だったという。人によってこんなにも受け取り方が異なることに驚いた。わたしはどっちなのだろうか、と迷った。結局わたしは確信があるわけでもなく、その時は再会できたのだからハッピーエンドだと思った。授業が進められていくにつれて、再会できた＝ハッピーエンド、なんてことがありあるのだろうかと思問になってきた。男が女を待ち続けていたら、つまり愛し続けていたら、百年は永遠に続いただろう。しかし、再会できたのは、男が女の愛を疑ってしまったからなのであった。

男が女を待ち続ける様子に、私はずっと続く螺旋階段を描いた。わたしはこう想像した。男は一人ではあつたが独りでは無かつた。男を見つめる女はずっと傍にいたのだ。すぐ後ろにいたかもしれない。空高く、宇宙の果てにいたかもしれない。それでも男を見守っていた。だから、男のあがる螺旋階段と対になるように、傍にもう一つ女のあがる螺旋

螺旋階段を描いた。その女の螺旋階段に真っ白な百合を重ねて描いた。百合には女の生命の輝きを与えたかった。百合は男の螺旋階段の最上部で大輪を咲かせるように描いた。わたしはこんな風に考えた。男は女と再会したのだ。しかし男の身体は百年目にして朽ちてしまったのだ。女と男を照らしだしていた白い月と、暗く朦朧とした雲の掛かる空には百年目を迎えて変化が訪れる。紅い空とどす黒い大きな雲が迫って来る。わたしは不思議だった。百年目を終えた世界には何が残されるのだろうか。永遠のその次にくるものなどあるのだろうか。

美術班の顧問の先生に「題名は」と聞かれてわたしは「“女”です」と答えた。何度も聞き返されて、その題名をつけた理由と夢十夜の説明をすると「自己満足で描くな。絵に責任を持って」と先生は言った。絵を見た人に何かを伝えようとする気持ちが無かったのだ。あまりにも自分の世界に酔っていた。描いているときに楽しいのは自分だけだった。その言葉を聞くと、急に自分の描いていた絵が色あせて見えた。

言うとは描くは違う。わたしはその世界を描き切れなかった。ただの自己満足で終わってしまった。展覧会が終わったあとに参加した学生の5人ほどから感想を書いた紙を受け取った。一人につき、2、3枚ほど配られていたものだった。「神秘的で綺麗です」とか「不思議な感じがして良かったです」とか、そういう感想を頂いたが、違うのだ。確かにわたしは、敢えて言葉で表現するならば不思議で神秘的な、世界が描きたかったのだが、言葉で表現できてしまう世界を描きたかったわけでは無かった。言葉の感想なのだから、



図A 『夢十夜 第一夜 再会』
油彩（布地キャンバス）40×92（cm）
2009年3月26日完成

無茶なことを言っているかもしれないが、わたしは言葉の表現を超える世界を描きたかったのだ。わたしの心の中に湧きあがった何か、言葉に出来ないものを、絵を見た人に伝えたかった。しかし伝えることができなかつたから、貰った感想も有り難く受け取れなかつた。

自分の感じたものをキャンバスに描く。しかし、キャンバスの上に思いを吐き出しているだけでは絵は出来ない。キャンバスに描くのは自分の感じたものをそれ越しに伝えるためだ。どうやったら自分の思いは見た人に伝わるのか、考えて、描いて、奮闘するのだ。

この絵は、伝える絵を描くというわたしに欠けていた基本にして最大の目標を与えてくれた。

引用 『夢十夜 第一夜』夏目漱石

優秀賞

ロダンに目眩する

小山 景子 福岡県 九州産業大学附属九州高等学校 3年

平べったい写真の向こう側に行ってみたかった。

洗練された光に当てられた彫刻たちは、写真の中でも十分魅力的に見えている。滑らかな大理石に眠る美しい女性。実物と見間違わんばかりの精巧な青年像。豊かに肉付けされた、狂おしげに抱き合う男女。少し厚いページを捲る度、自分から小さく息が漏れた。ただただ、美しいと思った。これらが自分と同じ世界にあるものとは、到底思えなかった。フランソワ＝オーギュスト＝ルネ・ロダン。あまりにも世界的に有名な彫刻家である彼は、私にとって本の中の世界の人物だった。

高校2年生の冬に、フランス・パリへの研修旅行があった。初めての海外旅行で、出発前日はよく眠れなかったのを覚えている。

自由行動の日に予定していた美術館の中で、一番期待していたのは勿論、ロダン美術館だ。憧れていた作品を間近で見ることができるのが、非常に楽しみだった。3日目だというのに、未だパリにいるという実感が湧かず、夢見心地のままメトロに乗り、見慣れない街を歩いた。

到着した美術館は、写真で見るとような、ロココ調の美しい建物だった。庭に出て目に入る、見覚えのある彫刻たち。緑豊かな庭に佇むそれらに、胸が高鳴った。一步一步近づ

き、見上げ、色々な角度からたくさん写真を撮る。「必死だね」と友達から笑われるほど、次々とカメラに収めた。いつか見た本の中に、自分がいる気がしていた。

帰国した後、旅行中に自分が撮った写真を見返して、愕然とした。写っているのは素晴らしい作品ばかりのはずなのに、何とも味気なく見えるのだ。自分が、風景から名画まで、わけも分からぬまま乱暴にシャッターを押し続けたのが、ありありと分かった。たくさん見たはずの絵や彫刻、あんなに期待をして見たはずのロダンの作品でさえ、私自身の中には何も残っていなかった。フランスに行ったら私は何をしていたのだろう、何をしていたんだろうと、恥ずかしくなった。また、もっと自分の目でしっかり作品を見つめればよかったと、激しい後悔に襲われた。

そして、今年の9月、大学見学の為に東京へ行った。1泊2日の小旅行、不安もあったが、一人で福岡から東京へ向かった。着いた日に大学を見学し、その後どうしても行きたかった美術館に直行した。上野公園にある、国立西洋美術館である。ロダンの作品を多く所蔵している美術館ということで、今度こそ自分の目でしっかりと作品を見ようと決意して向かった。

気合いを入れて、外に展示されている作品から館内の作品まで、時間をかけてゆっくり

と見て回った。なるべく、作品の歴史的背景などを排除して、素直な感性だけで対峙したかった。とにかく、じっくりと作品を見ていった。その途中、目が惹きつけられる作品があった。見ようとして見ているのではなく、目が離せないのだ。それは、ロダンの有名な「接吻」である。

私はこの作品を見て、そのドラマチックさに目眩がした。「美しい」の一言ではとても表すことのできない感情が、体中を駆け巡った。人間とは、こんなにも叙情的で熱を秘めているものだったのだろうか？素材は冷たいブロンズであるはずなのに、触れたら彼らの熱や呼吸を感じてしまいそうだった。そこには、肉付けの正確さや滑らかさだけのせいではない、何かがあった。私はしばらくその場に立ち尽くしていた。体が震えた。あまりにも、衝撃的だった。

私は、ロダンによって人間の美しさを知った。平伏したと言ってもいいのかもしれない。肉体の美しさはもちろん、その内面、情念の深さが尊く、美しいと思った。そしてそれは、本物の作品を前にして、その空気に触れてこそ知り得たことだ。

決して写真を否定する訳ではない。写真がなければ、私がロダンに憧れることはなかったし、こんなに心を揺さぶられる経験をする

こともなかっただろう。美術品、特に彫刻は物理的に運搬が困難であるからだろうか、なかなか日本にロダンの作品が来ることはない。だからといって、現地に本物を見に行くのは、私にとってそう容易くできることではない。そう考えると、写真という存在が、作品を鑑賞するという点でいかに大切であるかが分かる。

また、近頃では、写真を見るごとに、さらに感激を深くしている私に気づくことがある。ロダンの精神だろうか、魂だろうか、ロダンの持つ何かに驚異さえ感じる。この心地よい呪縛は何だろう。ロダンという神の手を持つ男の手の内に、私は完全に捕らわれてしまっているようだ。そう感じながらも、私はこの状態を楽しんでいる気さえする。

私はこれからもロダンを敬愛し、作品に感動していこう。フランスにも、是非もう一度行きたいと思っている。そしてまた、作品を前にし、そのロマン性や情熱、人間の美しさを突きつけられる度、きっと、私は目眩を覚えずにはいられないだろう。

優秀賞

子どもと大人と高校生

鴨河 愛 大阪府立港南造形高等学校 3年

私の中には感情的で抑えの効かない「子ども」と、物事を冷静に見て判断しようとする「大人」と、そのどちらでもない一歩引いた視点で自分を省みる「高校生」がいる。

私の頭の中では、制作中によくこの切り替えが行われている。

このことに気付いたのは少し前で、三つに名前を付けたのは最近のことだ。

この三つを名付けたのは、二年生の時の高校展（夏休みに開かれる高校生だけの展覧会で、大きく分けて美術・デザイン・工芸の三部門がある）にデザイン部門で出品する作品を制作した時に、この三つの「切り替え」が激しく、ほとんど自分でコントロールできなかったからだ（図1）。

制作に入って一番最初に出てくるのは、大抵「子ども」だ。

二年生の夏、高校展に出品すると決め、下描きを描きはじめた時から既に「子ども」の私は、テーマも表現したいことも頑固すぎるほどひとつのものにこだわっていた。

その時私が描きたかったものは「両親の不仲とその間に挟まれる子どもの心情」だった。

「子ども」に切り替わっていてもまだ冷静であった私は、「子どもから大人への言葉にできないメッセージ」があることを知ってもらいたいと強く思っていた。

描き始めてすぐの頃は、自分なりに真摯に画面に向かい「子ども心に両親の不仲がどれほどつらいか知ってもらえるように。」という純粋な気持ちで筆を進めていた。

けれども筆を進めていくうちに、どろどろとした気持ちが溢れてくるようになった。

日が経つにつれ、それはどんどん粘り気が増して行って心も体も重たく感じるようになり、画面にもそれが反映されて、元々おどろおどろしい構図であったけれど、暗く粘り気のある赤を基調とした背景も相まって更に恐ろしい画面になっていった。

初心は忘れ去っていて、時折昔あった出来事を鮮明に思い出し、更にどろどろは溢れてとぐろを巻き頭の中はほとんど空っぽで、ただ何かはこのどろどろを叩きつけたいという欲望のままに筆を進めていた。

けれどスタミナ切れは必ず起こるもので、「子ども」は徐々に大人しくなっていた。

それは制作が中盤に差しかけた頃だった。

この頃になると、切り替えが一日の流れの中で定期的に行われるようになった。

午前中の制作時間は「子ども」で、昼食を挟んだ午後の制作時間は「大人」だ。制作時間終了後も大人のままで、時々「高校生」に

切替わり「大人」の時に思った以上に反省点が見つかって落ち込んだりした。

「子ども」だけの時以上に私の頭の中は忙しく、テンションが上がったり下がったり、情緒不安定で、けれど自分では自分を制御できていると思っていた。

冷静な自分がいることに安心して、今まで以上に色んなものが見えていて自分の心も整理できていると思っていた。

「これは君自身？」

制作が終盤に差しかかった頃、担当の先生に画面中央の少女を指してこう言われた。

その時、周りの音が一切消え頭が冷めていくのを感じ、視界が一気に開けた。

そして何かがすとんと落ちたのを感じた。

左右を怒鳴りあう男女に挟まれたパジャマ姿の女の子。背後には後ろ姿のその女の子と、ほほ笑み合う男女の顔がある。私はその時にやっと、絵の中にある「つらい思いをしている子ども」に知らず知らず自分を投影していたことに気づいた。自分の中にある過去の体験による「しこり」を解消しようと、知らぬ間に必死になって感情的になっていたのだ。

この絵は昔の思いをそのまま形にしたようなものだった。



図1 鴨河愛 「それでも彼女は見ていた」
B1パネル、紙、水彩、2008年

ならば感情が溢れた原因の「しこり」は、私の中にある過去に置き去りにされた子どもなのかもしれない。

だとすれば、この「しこり」は消化されるものではなく、徐々に小さくなっていくものなのだろうか、とも思う。

後日、作品を見た母から

「あれは我が家やね。」と言われた。

誰かに思いが伝わったこと、それがただ嬉しかった。

優秀賞 風を感じて

木村 真奈 滋賀県立膳所高等学校 1年

濃い緑が一面に広がり、その中を左右にわたって駆け抜けるような形の、一本のゴールドが私の目の中に飛び込んできた。

今年の8月、広島県の母の実家を訪れたときに、近くのふくやま美術館に足を運んだ。その常設展示室の作品の中にそれはあった。作品名は『風 (fu) 』(年 2003)、作者は高橋秀。風や時間や空間、こうした目に見えないものを画家達は自らの感じた色や形で表しているのだ。作品を一面彩っている緑は、草原のイメージだろうか。またそれを分断するように流れる一本のゴールドは、まばゆい光を含んで草原の中を吹きぬけた心地よい風を表しているのだろうか。

私も、見えないものを自らのイメージや感じたままに描いてみようと思った。そこにはたった一つの正解などはなく、その人自身の心理や感情が表れるからだ。

私は父の仕事の都合で小学生の時の5年間、香港に滞在していた。香港は湿気が多

く、たくさんの人や車であふれていて、ムツとするような空気が不快だったことを覚えている。ある夏の夜、私は繁華街の交差点にいた。大勢の人が一つの塊となって動き出し、車は長い行列をつくって信号が変わるのを待つ。そのとき、ビルの間から風が吹いた。私を感じた風は、生ぬるく、排気ガスが混ざって濁っていたようだった。黒く見える影のような形で、たくさんの人と車を表し、そして、それらを挟んで高層ビルを大きく暗い柱のように表した。最後にそれらを包むようにくるくると渦巻く形で、私を感じた風を描いた(図A)。しかし、それはあまり納得がいかなかった。私は風がどこから吹いてきたとか、周りの様子などを伝えたかったのではない。その時の風は、シンプルで、それでいて何か纏わりついているような、それこそ言葉で表現できないものだった。どうすればいいのか。それを考えながら、次の作品(図B)に手をつけた。

私は高校で放送部に入った。初夏を迎え、大会の日の朝早くに、琵琶湖岸にある公園で湖に向かって発声練習をしていた。公園の木陰で、思い切り叫ぶ。すると、湖から返ってきたのは、やわらかく、冷たい風だった。私はその心地よさに、大会前の緊張はすべて忘れてしまっていた。私はその風を絵に描くとき、そのときの景色のことは全く考えず、ただ風がどのようなものだったかを考えた。透き通った、優しく、涼しい風に形や色はない。だから、自分の頭の中に漠然と現れてくる曖昧な完成図をもとに、直感で描いていく。エメラルド色で、湖の上を駆け抜けてきた風の涼しさを表した。無意識のうちに筆が動き、流れるような模様が紙の上に現れた。少し、私の思っていたイメージに近くなっ



図A 《香港の風》
2.3×7.9 (cm)



図B 《木陰の風》
2.3×7.9 (cm)

た。風が、その絵の前を通り過ぎて行ったような気がした。

最後の3枚目（図C）は、実際に吹いた風ではなく、心の中で起こった風を描こうと思った。

私は中学生時代、卓球部に所属していた。三年生最後の試合の時、私は相手にギリギリのところまで勝つことができ、チームの仲間と喜びあっていた。ふと相手を見ると、彼女は悔しくて涙を流していた。すると、それまで嬉しきでいっぱいだった心の中に、もやもやとした何かが入ってきた。私はもし負けていたら、泣くことができたのだろうか。私の卓球への想いは、相手に負けていたのだと思い、複雑な感情の風が吹いてきた。この風を表現するにあたって、私は指を使おうと思った。自分の感情を表すのだから、筆では物足りない、自分の身体を使って描きたいと感じたからだ。私は、黄色と赤と紺の三色を使い、曲

がりくねっているような模様を紙一面に描いた。黄色と赤は試合に勝ったときの嬉しき、紺は自分の卓球への思いの強さが負けていたことへの憤りを表している。私のどことなく不安定な気持ちをインパクトのある風の形で表すことができたと思う。

この作業を通して、風などの目に見えないものを見えるものとして表すことは、とても難しく、また楽しいものだと感じた。その人によって、感じ方、表し方は無限に広がっていく。窓の外で終わりゆく夏を惜しむかのように鳴いている蝉の声でさえも、今の私には、ある色と形が次第に目の前に現れてくるように思えてきた。



図C 《感情の風》
2.3×7.9 (cm)

優秀賞

アートと音楽

後藤 めぐみ 熊本県立第二高等学校 3年

私は芸術という枠組みの中には音楽も含まれると思っています。暗い色調の絵を見ていると、なんとなく悲しい音楽がバックミュージックのように流れてくる気がするし、楽しい音楽を聴いていると明るい色の絵が浮かび上がるような気がします。音にしろ色にしろ、それらが私たちに喚起させるイメージというのは結果的には同じだし、絵画と音楽には多くの共通点があると思うのです。

私は高校に入ってから石膏デッサンを描くようになったのですが、ある日デッサンの講評があった日の事です。その日の私のデッサンは「石膏に厚みが無い」と言われてしまい、少し沈んだ気持ちで家に帰りました。するとその日のピアノのレッスンでも、先生に「音に厚みが無い」と言われてしまったのです。ふつうは落ち込むところですが、やけに感動してしまったのを覚えています。

そこで、絵でも音楽でも、古典的なものを学ぶとき必要とされるものは同じだと思いあたりました。絵における比率やパースは、音楽ではリズム・テンポの役割をしているし、遠近感を出すとき、物を強く描いたり弱く描いたりすることと音の強弱を出すことは言うまでもなく同じことです。線の強さや色の重さで、音の強さや深さで厚みが出るのです。

メロディや色調に表情を乗せること、立体感を出すこと、涼感など、絵を描くこととピ

アノを弾くことに共通して大事なことを見つけるたび嬉しい気持ちになって、同時に不思議だなあと感じました。でも、考えてみればインスピレーションに区別が無いだけなのだな、と思いました。絵は視覚、音は聴覚によってと、それぞれ情報伝達の手段は違いますが、感じることは一緒です。静かな曲を聞いて悲しくなったり、明るい色彩の絵を見て気分が高揚したりすることは、どちらも同じように、芸術に触れた心が感動しているのです。

もうひとつ、私が絵画の世界と音楽の世界が似ていると感じたことがあります。

私も高校生になったので、ピアノの先生は少し難しい話もされるようになりました。その中で、音楽の“印象派”という言葉が飛び出したのです。

モネやルノワールなどの、絵画でいうところの“印象派”は私も知っていましたが、音楽にも同じように“印象派”があるとは知りませんでした。他にも古典やロマン派など、聞けば聞くほど似たような単語が出てきて驚くばかりでした。

その“印象派”のひとりにドビュッシーがいます。『アラベスク』や『ベルガマスク組曲』などで有名な作曲家ですが、彼の作品の中に『花火』という曲があります。

その曲を聴いたとき、私は容易に花火の上がる風景を想像することができました。星空に火の玉が上がり、大きな音とともに花開く。だんだん数が多くなって立て続けに花火があがる。最後に残り火がはぜる。そのような情景が次々と頭の中に浮かび上がったのです。これが“印象派”か、と思いました。風景や情景をそのまま音楽にする、なるほどそのようだと納得しました。

絵画の“印象派”は、細部まで細かく、リアルに描くのではなく、その場の空気や雰囲気といった全体感をとらえた作風です。絵画と音楽で、“印象派”の指す意味は異なっているものの、ルノワールやドビュッシーを指す言葉が同じ“印象派”であるというのは、面白いことだと感じました。それから、美術と音楽の繋がりをより一層、深く感じるようになりました。

絵から音楽を、音楽から絵を感じることはとても不思議で、面白くて、感動することです。それだけでただ楽しくなったり、新しい発見があったりします。私は絵を描くこともピアノを弾くことも大好きなので、いつか自分も、人にそんな印象を与えるものを作りたいです。もし、何となく音を感じる絵を描くことができたなら、その人もきっと不思議な気持ちで、私もきっと嬉しいでしょう。そのような関係が成り立つことは面白いでしょう。

そう考えるようになったのも、美術と音楽が私の中で離れがたく密接するようになったからなのです。

優秀賞 ぼてたまご

志田 雅美 静岡県立清水南高等学校 1年



図1 たまご000
紙・鉛筆、2008年

「じゃがいも」

はじめて描いたたまご(図1)はそう言われた。
30分で描いた。こんなもんか、と思った。
自分の中でそのたまごは十分まるかった、しろかった、かたかった。そのときは。
本当はデコボコで、薄汚れて、ボソボソとしていた。
ジャガイモに失礼なほどジャガイモ以下だ。
見ていたつもりで、まったくそうでなかったのだ。
それはスケッチブックの端っこに忽然と置き去られていた。
後ろでなりかけの箱とたまごもどきが騒いでいた。
なんとも寂しい絵だった。

目も手も何もかも私全部がわかっていなかった。
その時の私は全てが緩みきってしまった。
表現できるものなど何もなかった。
絵を描くために心と身体を引き締めろと言われた。
そのためには愛するものを手放すことも厭うな、と。

二度目に描いたたまごは2時間30分かけた。
前よりはました、そう思った。
毎日1つずつ2時間以上かけて描いた。

なおもたまごにはうぶ毛が生え、フワフワとつかめないほど柔だった。

するところアドバイスをいただいた。

「1週間に1つだけでいいから今度はもっとじっくり描きなさい」

1週間たまご一つと対話を続けた。

たまごが、かたくなった。

しかし依然課題山積である。

バールはまったく狂ってしまい、影は真っ黒になる傾向がみられる。

試行錯誤の故に画用紙が剥けてしまうこともある。

なぜ、そこまでたまごをかいているのか。疑問を持つ方もいらっしゃるかもしれない。たかがたまごとお思いかもしれないが、されどたまごなのである。

私はたまごを通して未だ語りえぬものを学ぼうともがいている。

それは技法的なことに関してだけでなく、自身のアイデンティティにまで及んでくるだろう。

わからないということは、ある面では幸せであり、しかしある面では恐ろしいことだ。

たまご046(図2)をかきあげた今も、やはり浅薄であるに変わりなく、世界の果ては全く見えない。

ゆえに、知りたいのである。

たまごを描くには、それが夢に出るほど「描く」という執着心を持たなければならないという。

また、物体から溢れ出るものと空間との関係性を感じ取り、それを正直に描き上げる集中力もいる。

それが出来たとき、みえるものはなんだろうか。



図2 たまご046
紙・鉛筆、2009年

楽しみでもあり、怖くもある。

今では1つのたまごに4時間以上かかる。

目に手が追い付かないのだ。

しかしその目でさえも未熟である。

これからも日々かかなければならない。

本当のたまごを描くまで、

優秀賞

舟越桂の世界

田中 百子 栃木県 宇都宮文星女子高等学校 2年

私は2年生になって彫刻を専攻し、様々な彫刻家や作品について知る機会が多くなりました。数々の著名な彫刻家の作品を見ていく中でふと目に留まったのが、舟越桂の作品でした。

舟越桂の作品は独特の空気を持っていて、一瞬にして引き込まれてしまうような作品ばかりです。見た瞬間、その作品しか見えなくなるくらいに、自分が舟越桂の世界に迷い込んでしまったかのような錯覚に陥りました。

そこまで人を引き込んでしまう魅力とは一体何なのでしょう。

舟越桂の作品の特徴として、まず楠でつくられていることがあげられると思います。日本の木彫では（特に仏像など）、檜が使われていることが、多いのに対し、あえて楠でつくられています。本人が挙げた理由として、色合いや匂いが良く、硬さもちょうど良く、さらに値段が安いということが挙げられました。次なる特徴として、目に大理石を嵌めていることが挙げられるでしょう。これは、他の彫刻家には見られない舟越桂独特のもので、そして最後に挙げられるのが、作品のほとんどが「ただ立っているだけ」の半身像だということです。本人曰く、「そばにいる」感じの像を作りたいのだそうですが、確かにそれは、叫んだり泣いたりするでもなく、生き生きと躍動するでもなく、ただ静かにそこに存在しているという作品なのです。

楠の色合い、大理石の透き通る瞳、「ただ立っているだけ」の半身像。今までに挙げたこれらすべての要因がうまい具合に混ざり合って、あの独特の雰囲気を醸し出している

のです。舟越桂の世界とは、まさに舟越桂独自の手法で生み出された、唯一無二の世界に違いないのです。

図1 「砂と街と」 1986

楠に彩色、大理石 81×56.5×36cm 作者蔵

そんな舟越桂の作品の中で、私が特に心魅かれたものは、「砂と街と」という作品です（図1）。この作品は女性の半身像で、その女性はコートにマフラーという格好です。まさに、「どこにでもいそうな」、「そばにいる」という感じのする像です。この作品のどこに魅かれたのかといえば、その雰囲気です。個人的な私の考えですが、女性は、ごく普通の家庭で育ち、ごく普通に暮らしている平凡な、どちらかといえば大人しい感じの性格なのではないかと感じました。そこまでその作品から親しみのようなものを感じるということは、もしかすると誰か、作者の身近な人をモデルに作ったのかもしれませんが。舟越桂の作品はこの作品に限らず、透明感があって見ている人の心の澄んでいくような気さえします。前述の魅力がそうさせているのでしょう。そして、ずっと一緒にいたい、と思わせるものも持っていて、そこに引き込まれていきます。特に、この「砂と街と」という作品は、さっき自分の横を通った人が身につけていたような、どこの店でも売っていそうな、ごく普通のコートにマフラー、このような当たり前前に日常にある光景を想起させるよ

うな作品だからこそ、特に心魅かれるものがあったのだと思います。

図2 「角をもたない理由」 2006
楠に彩色、大理石 103×58×28cm

図3 「森に浮くスフィンクス」 2006
楠に彩色、大理石、皮、雑木、スチール
227.5×98×106cm

舟越桂が現代日本で受け入れられる理由として、まさに、「そばにいる」ような、平凡で当たり前の肖像であることが大きな理由として挙げられると思います。特別異質が目立ったものではないのに、「その辺にいる人」というある種独特の雰囲気は舟越桂の魅力なのです。しかし、舟越桂のもう一つの大きな魅力は、「どこか異様である」ということにあると思います。舟越桂の作品のなかには「その辺にいる人」とは言い難い、骨格がずれていたり、切れた手首が肩に付いていたり（図2）、女性なのか男性なのか分からない中世的な像であったり（図3）と、「異様な」作品も数多く存在するのです。その作品たちは、従来の、骨格や筋肉をしっかりとつくったり、性を男性・女性と区別したりするような伝統に縛られない、彼独自の表現と佇まいをしているのです。しかし、この一見正反対のように思える二つの魅力ですが、この二つの魅力が全く別の相反するものかという、それは違うでしょう。舟越桂の作品は、

すべてにおいて一貫し、どこか遠くを見つめているような、物静かな雰囲気を感じられます。それは、「その辺にいる人」にも「中世的な像」にも共通して言えることなのです。

彼の作品の魅力とは、「身近」な「異質」であり、その一見相反するように思われる魅力が共存しているからこそ、どこか安心するような、気になるような、彼独自の不思議な魅力に、人々は惹きつけられるのだと言えます。

人物像の表現として、日常に潜む何か歪んだ感情や違和感などの現代人の心に内在する不安感から安らぎを求める焦燥感が、あの「身近」で「異質」な舟越桂の作品を求めているのかもしれませんが、それこそが、舟越桂の作品が現代人に深く受け入れられている理由なのでしょう。

引用・参考資料

編集：東京都現代美術館・森千花／栃木県立美術館・杉村浩哉／朝日新聞社・奥山敦『舟越桂展図録』（朝日新聞社事業本部文化事業部発行、2003年）

西村建治『Funakoshi Katsura』（西村画廊発行、2006年）

『AsahiGraph. 舟越桂の世界』（通巻4051号、1999年、p.12-14）

図版出典

図1 編集：東京都現代美術館・森千花／栃木県立美術館・杉村浩哉／朝日新聞社・奥山敦『舟越桂展図録』（朝日新聞社事業本部文化事業部発行、2003年p. 51）

図2 西村建治『Funakoshi Katsura』（西村画廊発行、2006年、p.7）

図3 西村建治『Funakoshi Katsura』（西村画廊発行、2006年、p.3）

優秀賞

楽譜における「アート」性の問題について

田中 伸明 千葉県 江戸川学園取手高等学校 1年

音楽は、譜面という形でしかその芸術を視覚で認識できないという点に於いて、他のどんな芸術とも異なる特殊性を持っている。音楽という芸術は、とつき易いかもしいが、通常その譜面はおたまじゃくしの羅列であり、多くの場合難解であるから、いざ作品と対峙しようとする、たちまち嫌気が差してしまうものであるかもしれない。

しかしながら、視覚的に譜面を楽しむということが出来る楽譜もあるのである。それはさしずめ、譜面の中のアートであり、楽譜を使った美術作品と呼んでも相違ないであろうと私は考える。バッハの「音楽の捧げ物」の中の多くの「謎カノン」をはじめとして、音楽の譜面の中にはそうした美術的効果が発揮されている作品が決して少なくないのだ。さらにそのようなところをヒントとして音楽の演奏の仕方の問題である「解釈」と結びつくこともある。ここからバッハの「謎カノン」を中心として、譜面の中における「アート」を考え、それらによる音楽的結果も同時に追求したい。

何と不思議な楽譜だろうか。2段目の楽譜、ト音記号が逆さまになっている。これは音楽の捧げ物の中の「謎カノン」である(譜例a)。

譜例a) Canon 4 a 2 per Augmentationem contrario Motu

私などは、これによって音楽が成立すること自体まず神業だと思うのだが、音楽の父と呼

ばれるバッハであるから、楽譜のあらゆる可能性について恐らく知っていたに違いない。彼にとって楽譜はきつと子供のようなものであり、自由自在に操ることが出来たのだとさえ思われてしまう。フルトヴェングラー¹はこう言ったという。「バッハの演奏は難しい。なぜなら私自身が神にならなければならないからだ。

さて、譜面のアート探求に話を戻そう。これは「謎カノン」とは言われているものの、一応の解決法があつて、出版譜にはこの謎の譜面と共に、まともな形での解決譜が付されている。それが無くてもどのような音楽が形成されるかの段取りは掴めるだろうが、楽譜としては不十分である。

譜面を解決してみよう。アルト記号、テノール記号で書かれている旋律は、そのまま演奏し続ければよい。問題は、逆さになったト音記号である。これは、セーニョ・マーク²の付いているところから、譜面を逆さにした形で導入する。つまり²からは、譜例bのような音楽が導入されるのだ。

譜例b)

不思議なことに、この一見ふざけているようにすら見える楽譜から、崇高なバッハの調べが流れ出したのではないか。バッハというと多くの人の頭に思い浮かぶのは、堅苦しさや荘重さなど決して楽しさの側面ではあるまい。ピアノ学習者には、バッハのインヴェンジョンやイタリア協奏曲などを面倒なもの

捉えてしまい、ピアノが嫌になってしまう人もいと聞く。しかし、このようなまさに音楽の「捧げ物」として、楽譜の可能性を追求し、譜面を「アート」とした作曲家が、本当に重苦しい、宗教の香りがする作品ばかりを作った人だろうか。確かにこの譜面の音楽も、決して聴覚的に楽しいものではないだろう。だが、譜面は普通に書いても良いのにこのように風変わりな書法を用いたことは、彼の芸術的な偉大性を示すことになると同時に、遊び心を示すものとはならないだろうか。音楽とは、「ミューズの技」である。音楽の父たる彼こそ、ミューズの神そのものか、それを全て使いこなせた「全能の人」であったと信じたくなくなってしまう。

ところで、この例以外にも譜面のアートは結構存在するものなのだ。例えばサン・サーンス²の「動物の謝肉祭」の中の「象」という曲のピアノの音型は、象の鼻のようである（譜例c。上2段。これは実際意図したと言われる）。また、何らかの形を表すではないにせよ、譜面に鏡像の技法を用いた例もある。これはピアノの譜面（譜例d：ベートーヴェン；クロイツェル・ソナタ）を中央で折って下の段を上段に重ねてみる（譜例e。下段を反転して上段との差異を比較）と、図形的にはほぼ重なるというものだ。これは聴いていても実感できることではない。ベートーヴェンの悪筆ぶりは名高い（？）が、彼の楽譜をアート化したこのような行為は、楽聖への芸術的高さの尊敬もさることながら、人間ベートーヴェンへの近親感も感じるものでもある。

「アート」とは前衛的なもの、現代的なものにのみその言語的価値を含有するのではない。美術や彫刻の分野に限らず、このような音楽の譜面の例のように、視覚的に見て芸術的で、好奇心を呼び起こすものもまた、「アート」と呼べるのではないか。

譜例c) 譜例d) 譜例e)

<註>

¹ ドイツの指揮者、作曲家。1886～1954。今や神格化される存在。著作も多数。

² フランスの作曲家。1835～1921。多方面に才能を發揮。作風は擬古典的、知的と評される。

<参考文献、ウェブサイト>

・フルトヴェングラー著「音と言葉」（白水社）～バッハ、バロック音楽の演奏について 他
・フーガの技法 研究室 (www.lcv.ne.jp/~nakgie/Japanese/index.html)

<引用図版出典一覧>

譜例は、すべて以下のウェブサイトより引用。

国際楽譜ライブラリープロジェクト International Music Score Library Project, IMSLP
URL: http://ja.wikipedia.org/wiki/International_Music_Score_Library_Project

上記サイトより引用した資料の原典は以下の通り。

・譜例a,b Bach-Gesellschaft Ausgabe (1851-1900), Band 31 Leipzig: Breitkopf & Härtel, (1885). Plate B.W. {{{3}}} / Editor; Alfred Dörffel (1821-1905) からp.9を引用

・譜例c Paris: Durand & Cie., 1922, plate D. & F. 10,154 (Reprint - Mineola: Dover Publications, 1998) Editor; - からp.15を引用

・譜例d,e Ludwig van Beethovens Werke, Serie 12: Für Pianoforte und Violine, No.100 Leipzig: Breitkopf & Härtel, 1862-1890. Plate B.100. からp.8を引用

優秀賞

STRANGE

田村 弥都 熊本県立第二高等学校 1年

私の絵を、「変だ。」と思われたい。

有りきたりな褒め言葉ではなく、「変」と。「何かおかしいよね。」「何か違うね。」と。

それは、他の人と違い、他人には模倣できないモノだ、という証明のようなコトだから。

そう思い始めたのは、中一の時。やっと新しい環境と美術部というものになれた初夏の頃。それは起こった。

私の絵の構図を、丸つきり盗られた。

私は小学校の時から、ノートにオリジナルのイラストやキャラの設定を描き溜め、それを肌身離さず持っていた。その中の1ページのイラストだった。

縦半分に分断された左右に半身の少年がいて、それぞれ内に想いを秘め、剣を携える。その中央に、手を組み、祈る少女の全身。今思えばありがちな構図だが、当時の私は少々気に入っていた。しかし、その全てを友人に真似され、しかもその絵を美術部の作品展示会に出されたのだ。

もともと、私のノートの絵の数々を、みんな「上手いね。」と褒めてくれて、それを誇らしくも思っていた。良い気分だった。でも私のイラスト（色まで塗っていたのに！）をコピーしただけのその子の絵も、「構図カッ

コイイ。」「小説の挿し絵みたい。」と褒め称えられていた。

「それは私の絵！私の構図なの、マネしないで！」

そう、叫ぶことができたなら、どんなに楽しかったか。その時の私には、ただ黙って、悲しみ、考え込む事しかできなかった。

どうすれば人にマネされないんだろう。「上手い。」って言われるだけじゃダメだ。そうか、誰にもマネして描けない絵を描いていけばいいんだ。

でも、誰にも描けない絵って何だ。そんな絵を全く技術の無い私が、プロじゃあるまいし、描けるというのか？

そうして2年経った。3年の秋、美術部の作品展示会の季節。1年の時私のマネの絵を描いた子は、忙しいのかもう美術部に来なくなかった。マネされる心配は無いけれど、2年前の自分の中のモヤは、未だ晴れずにいた。

自分以外、誰にも描けないモノとは何なのか。全然答えを出せずにいた。

そして、私が展示会の作品に何を描くか悩んでいた時。ふと、その前の年に誕生日プレゼントとして叔父がくれた本が、視界に入った。それは漫画の指南書のようなもので、将来漫画家になりたい私のために、叔父が考えて買ったのだろう。分かりやすく、イラスト

や投稿作品を載せて、解説されているものだった。

久しぶりにその本を開き、何気なくパラパラとめくっていると、あるページで手が止まった。それは、投稿作品を添削しているトピックだった。そこに、ある文章が綴られていた。

「まず漫画家で生き残るためには、『上手い』っていうよりも、『変』と周りに言わせることが大切だ。『カッコイイ』とか、『可愛い』は、誰でも何回も練習すれば表現できるもの。でも、『変』はその人の特性。『他の人と違う』ってコト。それを引っ込ませず、どんどん前に押し出す漫画を描いて、『何だコレ?』と読者に思わせる漫画家が、これから生き残っていくはず。」

詳しくは覚えていないが、こういう趣旨の言葉だった。

これを見た私は、「私の求めていた答えはコレだ!」と思って、全身を雷が駆け抜けるような感覚に包まれた。そして、目の前にあった出展用のボードに絵を描き始めた。

そうして、展示会当日。展示会場である図書館の壁には、もちろん私の絵も飾られていた。

一面白黒。真ん中で男とも女ともつかない奴が、電線に座り込んでいる。そしてその電線をまとめる電柱の下には、逆巻く川の激

流。その中心には、笑う、魚?画面の上部には数々のアーティファクトで装飾された鳥。の、翼は機械的な亀裂が入り込み、いつのまにか夜闇の空と一体化している。

まさしく、「意味不明で、変!」な作品だった。今でも少し笑える。でも、描き終わって、何か大切なモノを見つけた気がした。

展示会が無事に終わった後、展示会場に設置しておいたコメント用紙を見る機会があった。その一枚一枚を見て、ビックリした。

「一つだけ白黒の作品がありましたが、凄かったです。」「変だけどずっと見ていたいです。」「変!でも新しすぎて気持ち良い!」

それは、私の作品名を指した、大量の文章の数々だった。嬉しすぎて、涙が出てきた。それからの私は「変」なコトを思い出し、「変」なモノを描き、「変」なモノを生み出す。そのことを大前提として活動していくことにした。

全ては、遙かな夢のために。私はこれからも「変」でい続ける。

優秀賞

G I F T A R T

～ありったけの気持ちを込めて～

角田 淑美 群馬県 共愛学園高等学校 3年

私が共愛学園美術部の一員となった当時高校1年の4月。桜は、満開と言うには遅すぎで、咲き終えた花びらが門からの道を、薄ピンク色に染めていた。思えば、入学式当日、「いざ、今日から共愛生」と門をくぐったあの日。春の温かい風に誘われるかのように、幾つもの桜の花びらが私たち新入生を取り巻いていた。見るモノ、聞くモノ、感じるモノ、全てが新品の香り漂う高校生活がそこには広がっていたのだ。

共愛学園美術部の主な活動は、カード作り。はがきサイズのイラスト紙に思い思いに絵を描くというモノだ。その小さなカードは数百枚も刷られ、生徒やお年寄り、来客者に配られる。5月には「母の日」、6月には「花の日」、12月には「市民/学園クリスマス」と、キリスト教ならではの行事が年間予定表に記されていた。そんな感謝の日に贈られるのが、美術部員が描き上げたカードである。しかし、選ばれるのは多くて4作品程度。部員数に比べたら、残酷な数字だった。どれが良い作品かと聞かれたら、それは、見る人によって何通りもある気がした。そんな中、選ばれるために私は必死だった。

6月「花の日」当日。4枚中2枚が私の絵になっていた。運良く選ばれたのだ。「花の日」には、午前中通常授業をして、午後には指定された老人ホーム訪問が組まれている。1年生の私は、クラスでの訪問となった。カードは生徒1人1枚。それを手にお年寄りの方々とコミュニケーションをとるのだ。と

ころが、カードを配られても動こうとしない生徒の足。こわばる顔つき。人の動きを気にする目の動き。初めての体験を目の前にして、誰もが一步を踏み出せずにいるとそう私は思った。「行ってこい。」と、担任の声でやっと踏ん切りができた。幼い頃から人と接する機会から逃げていた私にとって、お年寄りの方々とのお話はあまり弾まなかった。だが、「きれいだねー。」と、私の手渡した私のカードを見てくれている姿に、嬉しさよりも感動よりももっともって温かい気持ちが、とってもしんどいところから湧き上がってきていることに私は気付いた。そして、私と同じ思いを、私の絵をきっかけに感じてくれる人の存在が何より有り難かった。

その日を境に、私は絵を書く理由を見つけたのだ。誰かのために描きたい。そう強く思い出したのだ。だがそれは、思っていたよりも体力的に苦勞することだった。「相手はどんなモノを喜ぶだろう。何に癒されるだろう。」そう考えたとき、やはり「あなたに会えて嬉しい」という、素直な気持ちを表したいと思った。定期テストにかぶるようなある作品の提出期限。私は、休みの日でも朝暗いうちから、まるで石像のように同じ姿勢のまま、1枚の作品を作り上げるために真っ白なキャンバスに向かっていった。そのまま深夜3時を回ることも少なくはなかった。描いている時間は、時計の針の音が1秒1秒を刻む音が聞こえるだけで、静寂の世界だった。しかし、そんな中、私は心から溢れ出しそう

な高ぶる思いを1本の鉛筆で縁取り、様々な色で彩るのだった。疲れも眠さも絵を描いている時は忘れられた。そして、描き終えて知る酷い肩の重みにいつも驚かされるのだった。出来上がった私の絵たちは、自信を持って各々を主張していた。

12月「市民/学園クリスマス」でも、カードが生徒たちに贈られる。そしてもうひとつ、美術部員は、お世話になっている先生方約120人全員に、1人あたり約5人の割り当てでクリスマスカードを贈る。これは、サイズにとらわれず自由な大きさと、色画用紙に銘々が絵やメッセージを添えるというモノ。日頃から顔を知っている先生方にカードを手渡す時には、つついとお互いに照れ隠しをしてしまう。授業中には見せない顔も素直に見せてもらえる瞬間は、美術部員だけの特権かもしれない。

1年が過ぎ、もう1年が過ぎた。今年私は高校3年となり、美術部員としての集大成とも言える「共愛バザー」の絵に挑んだ。ポスター用に1枚、パンフレット用に1枚と、学園で2枚しか選ばれないその絵に、ありったけの気持ちを注いだ。「どうか、この絵を見て、多く人が足を止めてくれますように」と。そして、何枚もの優れた大作の中で私の絵は、ひときは輝いてくれたのだった。

私がこうして描き続けられたこと。そこには、笑顔をくれる多くの人との出会いがあった。絵から教わったこと、それは“描くこと”は“出会うこと”だということ。そして、

本当に人はお互いを支え合っているということ、身をもって実感したのだ。私は来年から、服飾関係の大学へ進路を決めている。絵から服へとキャンバスを変え、形を成していく。1つひとつにありったけの気持ちを込めて。



優秀賞

アートの素晴らしさ

津屋 敬弥 滋賀県立膳所高等学校 1年

僕の親は十年前からこども達にアートに触れさせるボランティア活動をしています。僕も小さい時からその活動を体験してきました。始めは小さな活動でしたが、徐々にたくさんの感動を子供たちや先生方に残していききました。

ある学校での活動の際の話です。そのクラスに授業態度が悪く、先生も手を焼く生徒がいました。母の活動のワークショップが始まって、もちろんおとなしく聞こうとはしません。

しかし、時間が経つにつれてその生徒は段々と話を聞くようになっていきました。そして最後にはとてもすばらしい作品を残しました。その出来事に先生はとても驚き、感動してくれました。

そんな話を家で母から聞かされて、母は良い活動をしているのだなあと感じ、僕も一緒にボランティアしたいなあと思っていました。

2007年7月16日、新潟中越沖地震が発生しました。マグニチュード6.8、負傷者2345人と非常に大きな地震で、被害もたくさんでした。僕の母方のお祖父さんと従兄弟は新潟の柏崎市に住んでおり、ニュースで柏崎は震度6強とのことでした。リアルタイムでニュースを見ていた母親は涙を流してしまいました。僕も学校から帰ってきてその地震のニュースを知った時は驚きました。新潟にいる親戚とようやく連絡がとれて消息を

聞くと、幸い誰もケガをした人はいませんでした。しかし従兄弟の家の中は家具がなぎ倒されぐちゃぐちゃで、家の外も倒壊した建物や、ヒビが入り割れてしまった道路などで、とても悲惨な状態だったそうです。それを聞いて何か自分たちにできることはないのかと、まず母と姉が被害状況を見に柏崎に向かいました。そして現地の熱い要望と自分たちのボランティア精神が合わさり、『柏崎キッズミュージアム』が計画、実行されることになったのです。

これは、柏崎の小学校の体育館を借りて、陶芸体験やストーンペインティング等の様々なワークショップを行い、少しでも被災地の方々に楽しんでもらい、地震の恐怖や不安を緩和してもらおう、というものでした。これは二度とない貴重な機会だと思い、僕もこの活動に参加することを決めました。

様々なワークショップがある中で僕は「葦笛を作ってみよう！」のコーナーの担当になりました。琵琶湖の葦は有名で、以前に同じものを作ったことがあったので、これなら僕も力を出せるだろうと気合を入れました。

そして、8月26日、たくさんのボランティアの人々と一緒にバスで柏崎に向かいました。バスの中ではみんなやる気にあふれた感じでした。しかし、実際現地に着いてみると予想以上に被害は大きいものでした。めくれあがった道路、崩れてしまった神社、赤い紙に”危険”と書かれたものが貼ってある家々……。こんな状況にいる人々を本当に

被災者の心を癒せるのか、と不安になってしまふほどでした。

そんな中で準備が進められ、ようやく『柏崎キッズミュージアム』がスタートしました。

すぐに子どもたちと親御さんが入ってきました。「葦笛を作ってみよう！」のコーナーにも初めてのお客さんが来ました。葦笛の作り方を説明するときはとても緊張しました。しかし参加してくれた人は笑顔で「ありがとう」と言ってくれました。その言葉を聞いた時は本当にうれしくて、緊張がほぐれ、もっと頑張ろう、と思うことができました。その後たくさんの方がこのワークショップに参加してくれました。葦笛作りとは別に折り紙も同時に行いました。そこでは子どもがたくさん来てくれました。子どもたちの笑顔は本当に楽しそうで、僕も楽しくなり何度も折り紙で遊びました。あっという間に終わりの時間が来ました。最後に子どもたちが、「お兄ちゃんありがとう。また来てね。」と言ってくれました。(図A)

最後に小学校の校長先生が感謝の言葉を言ってくれました。「被災によって身も心も恐怖でいっぱいだった子どもたちの笑顔が見られて本当にうれしかったです」と、感無量の様子で泣かれていました。

このプログラムに参加することで、従兄弟の地元である柏崎で、被災者の人々を自分なりに援助することができて本当によかったと



図A 『柏崎キッズミュージアム』での「葦笛を作ってみよう！」のコーナー（右端が私）

思いました。それと同時に、「アート」って本当にすごいなあと思いました。やはり人は「アート」に触れることによってなぜか気持ちが楽しくなったり、引き込まれたりする、ということを改めて確かめることができました。

この体験がきっかけで、その後も母の活動に協力をして、様々な「アート」を通し人々と触れ合っていました。現在は高校生になったので、なかなか母の活動に参加することはできませんが、またいつか「アート」を通して人々の心に感動を与えたいと思っています。

優秀賞 白の巨匠

中藤 裕子 滋賀県立膳所高等学校 1年

白という色が好きだ。ふとピアノの白鍵を見たときの、光が反射したあの何とも言えない、撫でるような白が好きだ。あの神秘的な白は、光にしか作り出せないものだと思っていた。しかしその考えはわたしの思い込みでしかなかった。わたしは思わぬところでその白に巡り合うことになる。わたしがその白に出会ったのはある人物の絵の中だった。画家の名は藤田嗣治。彼は日本だけでなくヨーロッパでも有名な画家である。

2006年初夏、わたしは父に連れられ京都国立近代美術館で開かれていた藤田嗣治生誕120年の展覧会に行った。それが13歳のわたしと藤田嗣治との出会いだった。会場にはたくさん裸婦画があった。その裸婦画の中にあの白を見つけた。彼女たちの肌の色はまさしくあのピアノの白鍵の色だったのだ。あの白を人が創りだせるという事実にとだ驚いたのを覚えている。そういう訳でわたしは今回彼の作品について書くことにした。

藤田嗣治といえば有名なのは裸婦と猫だろう。彼の裸婦たちは「乳白色の肌」と称されるほど綺麗な白い肌をいる。そして猫たちの表情は非常に豊かで人間くさい(図A)。そんな裸婦と猫は彼にとっての一大テーマである。代表作に1923年に発表された「タピスリーの裸婦」などがある。その他にも彼が多く描いているモチーフは幾つかある。子ども

たちや宗教画などがそれに当たる。子どもたちの皆似たような表情をしているところが興味深い。彼は「私の数多い小児の絵の小児は皆私の創作で、モデルを写生したものではない。この世の中で見た小児の印象は忘れずに画の中には取り入れる事もあるが、本当にこの世の中に存在してる小児ではない。私一人丈の小児だ。私には小児がない。私の画の小児が私の息子なり娘なりで一番愛したい小児だ」(藤田嗣治芸術試論)と述べている。そんな彼が特に強く思い入れていたのは宗教画だったらしく、彼の最後の大きな仕事はノートル＝ダム・ド・ラ・ペ礼拝堂のデザインだった。その礼拝堂はステンドグラスやレリーフなど細部まで彼によってデザインされ、内部にはフレスコ画が壁一面に飾られている。このように彼は実に幅広い美術活動を展開していたのだ。

そんな彼の作品たちの中で最もわたしの心に残っているのは裸婦画でも動物画でも子どもたちの絵でも宗教画でもない。戦争画だ。

彼は第一次世界大戦、第二次世界大戦という大きな戦争の時代に生きた。当時軍内部では民衆の士気を鼓舞するのに絵画の力が有効であると考えてられていた。そこで軍は多くの画家たちに戦争画を描かせた。それらの多くは日本軍が敵軍に勝利し、力をみせつけているといったような戦争を肯定している雰囲気

気のものばかりだった。そんな中、彼の作品だけはそれらと全く異なるものだった。彼の作品は飾ることのない、切なく哀しく惨いありのままの戦場を映し出していた。そんな作品たちの中でわたしが最も印象深かったのは「サイパン島同胞臣節を全うす」(図B)―その絵はサイパン島で起こった、後に「バンザイ・グリフ」と呼ばれる民間人の集団自決を彼の感性で描いている。男たちは敵軍の接近を見つめ、女たちは強い覚悟を秘めた眼差しをし、右部には神に最後の祈りを捧げている人たちと崖から飛び降りていく人たちが描かれている。全員が死の迫りくる中毅然としている。そんな中まるで一人別世界にいるようにある一人の軍人だけがじっと絵の鑑賞者を見つめている。その眼はまさに藤田自身のわたしたちへのうったえのようだった。彼の作品は実に生々しく、わたしに真の戦争の恐ろしさをもって迫ってくる。彼の作品は見るものに「戦争は本当に恐ろしいものだ。戦争なんてやるべきではない。」と、そう思わせてくれる。戦争画の本来あるべき姿だと思った。戦争画とは本当は戦争のむごさ、冷たさを描き、人々に平和の大切さや生きていることの喜びを伝えるものでなくてはいけない。藤田の作品はまさに「これこそ正しい戦争画です。」といえるような作品なのだ。

そんな絵を描いた彼が後に戦争協力者として日本の画壇から追われるのは実に不可解な話ではあるが、それはさておき彼のまっすぐな絵に対する思いこそ、彼が波乱の人生において守りたかった思いだったのだろう。

また今日もピアノの白鍵の色にあの白い肌を思い出す。あの白い肌の作者の眼が異端にならないようなそんな国にいつかなればいいな、と思った。

図A「猫(争闘)」1940年

図B「サイパン島同胞臣節を全うす」1945年

引用・参考資料

藤田嗣治 LEONALD FOUJITA

藤田嗣治(夏堀全弘・著 三好企画2004年)

藤田嗣治 Yahoo!百科事典

Today's Weathercast

優秀賞

ヒューマン・アート・ヒューマン

中山 綺華

熊本県立第二高等学校 2年

私は、作品を作るにあたって、必ず考えることがある。それは、「自分の作品を見た誰かと、どんな世界を共有するか」。私の芸術活動の意義でもある。芸術というのは、鑑賞者を巻き込んで、自分の世界を楽しんでもらう、一種のイベントのようなものだと思う。私は、しばらくピアノを習っていたが、音楽の分野でもそれは変わらない。きっと、どの世界でも、それは同じことなのだと思う。

しかし、作品を見た人を、自分の世界に引き込むには、かなりの魅力と個性の強さが必要だ。私は、まだまだ未熟で、今まで一度も、自分も他人も納得できるような作品を作れたことがなかった。だからいつも、自分の理想と現実とのギャップにジレンマを感じていた。

美術系の高校生のメインイベントとも言える高校美術展が近づき、皆それぞれ制作に取りかかる中で、私一人、スタートしきれずにいた。今回は、どうしても自分が納得するまで、考え通したかったからだ。

「個性のある作品、上手な作品、入賞できる作品…」
そんなことばかり考えて、どうしてもかたくなってしまう。そうしている間に、まわりは着々と完成に近づいていく。自分だけ置いてきぼりにされたような気分だった。焦っていて格好悪い。情けない。悔しい。苦い感情が頭を支配して、そればかりが巡る。真っ白の画面に自分の頭も真っ白になって…もうだめだと思った。

私のだめになった時、私より、私の対処が上手い母に相談した。すると、「少しの間何も考えるな」という応えが返ってきた。何も

考えなくていいと思うと、何かが解けていくのを感じて、無性に泣きたくなった。

塩辛さの残る、からっぽの頭の中で、うつらうつらと散らばった思考を掬い上げる。「私が、本当に表現したいものは何なのか…」から考え直した。頭の中に、ちらちらと燃える欠片が、掴めそうで掴めない。だから、上手な作品や、過去の作品を見るのを止めて、自分と向き合うことだけに集中した。

私の理想。今まで誰も見たことがないような作品、たくさんの人の記憶に残るような作品、そして何より、自分が心から楽しみ、納得できる作品。私はそういったものをつくりたかったのだ。

私は、自分の身の周りから、自分が楽しんで作れそうな、自分だけの表現ができるテーマを探した。環境問題や社会問題など、大きくて漠然としたものではなく、私の心の根っこにあって、いつも考えていること…

ふっと、頭の中で、今までで一番鮮明に浮かんだ。私のクラスメイト。

どこまでも憧れで、ライバルで、大切な友達だ。思えば、今までこんなに他人に興味を持ったことはなく、彼らの輝きの魅力に、今まで何度も影響されてきた。誰かと何かを共有する喜びを知ったのも、彼らと出会ってからだった。今の私は、彼らが居てこそ。

クラスメイトというテーマで作品を作る。きっと、自分の納得できる作品になると思った。

私のクラスは、とても表情が豊かである。よく笑い、よく泣き、よく怒る。自他共に認める個性派集団だ。そういった雰囲気は、どうやったら出るだろう。

軽快なタッチ、動きのあるポーズ、カラフルな色彩…考えた結果、これらの表現効果が上手く出せそうなデザインのジャンルを選択し、制作を開始した。まず、クラスメイト全員をスケッチする。一人ずつ、表情やしぐさ等を、徹底的に観察した。最初は、四十人もの顔を、簡略化して描き分けられるか不安だったが、実際に描いてみると、皆それぞれの雰囲気を持っている。特徴を見つける度、その人の新たな魅力が増える。自分がどんどん夢中になっていくのがわかった。

画面中、人、人、人。軽さを見せるために、線を少なく、細部をデフォルメしたクラスメイト達が、ひしめき合っている。それぞれ、違う色の作業服を着て、思い思いに動く。誰もが、生き生きとした表情で、エネルギーに満ちあふれている。初めて、思い通りに描けた。

完成に近づくにつれ、私の作品を見てくれる人が増え始めた。たくさんの方が、私の作品に反応し、楽しんで、笑って、感想をくれる。こんなに自分の作品を好いてもらったのは初めてで、嬉しくて、本当に描いてよかったと思った。

たった一つの事象が、たくさんの衝撃を残す。その衝撃を直に受けることで、私がずっと課題とし、理想としていた「世界を共有できる」作品に近づけたという手ごたえを感じられた。

将来、私はアートに携わる職業に就きたいと思っている。私が仕掛けた世界で、人々がどんな風を感じるのか知りたい。今回のように、直接感想をもらえる機会は、この先少な



《39A!》 2009年 アクリル

いかかもしれない。それでも私は、あの時の感動が、たぶん一生忘れられなくて、アートで人とコミュニケーションがとれる生き方を探すだろう。アーティストは、感じる誰かが居て、初めて完成する人種なのだ。人や町を巻き込む仕掛け人。私はそういった立場からアートを発信していこうと思う。

優秀賞

モノクロームの写真

西村 美萌 大阪府立港南造形高等学校 3年

古ぼけた赤の装丁の背表紙に、明朝体で描かれたタイトルは横向き。本自体にあまり厚みはなく、布っぽい質感やくすんだ赤を基調としている装丁は初版のグリム童話が描かれているような、陰気な絵本を連想した。

その本が置いてあったのは古書店の、作品集と分類されて大小様々な本が乱雑に並べられていた一角だった。大きさが揃わないためか並びは乱雑としか言いようがない適当さで、分厚い作品集が多く立ち並んでいた。その中に埋もれるには、その本は異分子に思えた。

「無垢な老女と無慈悲な少女の信じられない物語」

タイトルも、酷く目を引いた。

作品集と呼ぶには相応しくないのでは、と思った。装丁と相俟って、あまりにも暗澹としすぎているからだ。

これは同タイトルの展覧会で発行された、やなぎみわという写真家の作品集だ。

本の中には展覧会で飾られた彼女の作品が取められている。作品は大半がモノクロームだ。その中でも当時「寓話シリーズ」と呼ばれ、現在「フェアリーテール」と名付けられたシリーズは全十二作品全てがモノクロームで、やなぎみわの過去の作品を多少でも知る人は驚くだろう。

図1 やなぎみわ「眠り姫」100cm×100cm
ゼラチンシルバープリント 2004年

彼女の作品には「エレベーターガール」という有名なシリーズがある。タイトル通り、若いエレベーターガールがモチーフに撮られている。作品は強い色彩にあふれ、とてもきらびやかだ。

しかし、「エレベーターガール」のビビッドトーンの強い作品から一転、「フェアリーテール」の作品はモチーフから作品構成に至るまで、百八十度違う世界を見せる。

「フェアリーテール」の作品は、無彩色で構成されているのにも関わらず、生々しく、そして鮮やかだ。モノクロームの世界なのに、織り込まれた寓話の世界観、老女と少女の対比により、いっそ色彩豊かにさえ感じられる。色彩が極限まで削られているため、画面に無駄がない。通常の写真なら視覚的にとらわれてしまう色面がない分、鑑賞者はやなぎみわの作る世界にのめり込む。

色彩を抑え込んだことにより作られた抑圧された空間は、モノクロームだからこそ。そ

してその空間に佇む、特殊メイクを施された少女達。

彼女の作品は絵本ではなく、寓話に焦点を当てた構成だ。その中にある倒錯的な雰囲気には違和感がないのは、極限までそぎ落とされた色彩のおかげだろう。そしてその雰囲気が、鑑賞者へと退廃的な世界観を突きつける。

作品内の老女は、特殊メイクを使っている。あどけない肢体を晒しながらも、少女は老いた女を演じる。顔には明らかな継ぎ目があり、まるで仮装のようでもある。老女が実際は少女であると誰もが気づくだろう。

ヘンゼルとグレーテルに出てくるような、絵本や寓話で語られる老婆は醜女だ。子どもを取って食う。魔女にそんなイメージがあるように、彼女らは無情でなければならない。それは所謂、人間の負と呼ばれる部分を描かなければならないからだ。そしてその対比として、少女の明るい部分を際立たせる。ヘンゼルとグレーテルが老婆の策略を返してかまどに突き落としたように、困難へと立ち向かい、結果、醜女に打ち勝つ。

だが、やなぎみわの作品はそれを許さない。

もしこれが本当に醜い老婆だったなら、また違っただろう。けれど彼女が取ったのはあくまで「老女のふりをした少女」だ。つまり、撮られているのは根本的に少女でしかな

いのである。それにより、普段なら対比として描かれる老女を少女と同じ明るみに並べ、或いは少女に内在する負の部分を際立たせている。類型化された醜い老女や無垢な少女は、そこに居ない。

それはまるで現実世界にいる老女や少女のようで、奇妙な生々しさを感じた。町中で出会った親切な老女、周囲の目など気にせず迷惑行為を繰り返す少女。無垢な老女と無慈悲な少女。道すがら、すれ違っていても可笑しくないくらい現実味を帯びて、彼女らは私達の中に存在している。

だからこそ、主題は「無垢な老女と無慈悲な少女の信じられない物語」であり、作品集のタイトルなのだと思う。

参考資料

やなぎみわ「無垢な老女と無慈悲な少女の信じられない物語」(原美術館、2005年)

図版出典

図1 「眠り姫」 Miwa YANAGI(<http://www.yanagimiwa.net/fairy/index.html>)

優秀賞 命

野沢 れい 札幌平岸高等学校 2年

命が消えた時を見た。

私が初めて動物をテーマに立体を作ったのはこの時だった。

絵を描くことより素材に触れて、感じることでできる立体が好きだった。

そして一年前、高校一年生の秋、私は道展U21という大会に作品を出すことになった。そんな時私にふと芽生えた想いは「命の宿っているもの」を作りたいという想いだった。なぜ突然そう思ったかはよく覚えていないけれど、多分衝動的なものだったと思う。そしてその決断が私の中でアートと生命とういものを結びつけてくれるものとなる。

2008年11月、私は札幌市円山動物園を訪れた。目的は一つ、「命の宿っているもの」を実際に見て感じるためだ。

私はある本を見て興味を持った「キリン」を作ることにしぼり、動物園に行ったら特によくキリンを見ようと意気込んでいた。園内に入ると私はキリンのいる柵のところまで駆寄った。

するとそこには異様な雰囲気を持った一匹のキリンが柵の中の隅っこでふるふるとしている姿があった。そのキリンはユウマという名前前のようだ。

すぐにユウマのいる隅にいったその顔をよく見た時、私は疑問を持った。

「どうしてこんな目をしているのだろう。」と。

寂しい目だった。寂しくて悲しくて、何か強い想いを持っている。その真っ黒くて大きな目をずっと見ていた私は段々と深い深いところに落ちていくような気分にさえなって、私は少し泣きそうだった。

そして次の日の朝、私は新聞の朝刊で円山動物園にいたキリンの二匹の中の一匹が亡くなったことを知った。

タカヨ、1978年四月に円山動物園内で生まれた。享年30歳。国内で最高齢だったらしい。13頭ものこどもを産み、偉大な母として死んでいった。

私はすぐに気づくことができた。あの時、私がユウマから感じた悲しいという

気持ちはこういうことだったのだと。

動物は人間と一緒だ。

話すことはできないし、文字を書いたりして何かを伝えることもできない。

けれど、訴えかけてくる、その目で、心で。その時私は決意した、ユウマを作ってみよう

と。ユウマを作品で表して見たかった。悲しみの中でもどこか強い意志を持っているように見えたあのときの命を、表してみたかったのだ。

初めて作る動物、初めて作る大きさ、私は少し戸惑っていた。

上手く作れるだろうか。例え見た目の形が上手く作れたとしても、それだけでは意味がない。大事なのは訴えかけてくるような命の姿とその独特の雰囲気を持つ空間が作れるかどうかだ。

元々あまり器用な方ではない私はなかなか思うように作れなくて、苦戦していた。それも本物のキリンに近づけるためにと高さを2m弱という今までにやったことのない大きさに挑戦したというのが苦戦するひとつの理由だった。

けれど私はどんなに苦戦しようともあの時に感じたあの雰囲気と気持ちだけは絶対に忘れないようにしないと決めた。思いながら作品を作りはじめた。

のこぎりを持って木を切って中骨を作る、それに新聞紙をぐるぐると巻き付けてその上から更に紐できつく縛り上げる。これでだいたいの形は完成する。

更にそれにキリンの肌になる布を貼付けて、
キリンの模様を肌に描いた。
そして一番最後に目を入れ込んだ

やっと、やっと完成した。
苦勞した、たくさん悩んで、時に嫌にもなっ
て、でも作ることはやっぱり楽しくて一生懸
命だった。
けれど同時に思った。これが私の本当に作り
たかったものなのだろうか、と。
消えていった命を見送ったユウマ、そんなユ
ウマを見ていた私。あの時の私達のいた空間
はこんなものだっただろうか、と。
一生懸命に作った。けれど逆にそんな作品を
作成する過程が全面的に出てしまっていて本
当に伝えたかったはずのものが弱くなってい
る気がしてならなかった。

あれだけ作る前にあの時の気持ちを大事にし
ようと思って作りはじめたのに上手くいかな
かった。とても悔しくて持っていきどころの
ない気持ちでいっぱいになった。
確かに強い想いはここにあった、けれど自分
の感じたことを思うままに、感じたままに表
現するにはきっと最後まで自分の気持ちを忘
れずにそれをやり通す忍耐力と経験が必要な
のだと身を持って実感させられた。

それからしばらくして私の作品が札幌市民
ギャラリーに飾られた。
私はそれを友人とふたりで見に行った。
入り口の自動ドアが開き私が一番最初に目に
したのは私の作ったキリンだった。
すごく驚いて作品に近寄ろうとした。まさか
こんなに目立つところに飾ってもらえるなん
て。
私の作品の周りには何もなくて他の作品と結
構な間隔を空けたところに私の作品はたたず
んでいた。
友人はつぶやいた。「ぼつんとしていて寂し
そうだね。」と。

寂しそうに悲しそうに、けれどどこか決別の
強い意志を持った姿が見えた。

私は嬉しかった。
もしかしたらこの作品を見てその雰囲気を読
み取ってくれた作品設置の係の人がこのキ
リンに合ったこの場所を選んでくれたのもし
れない。
都合良く考え過ぎかもしれない、それでも私
は微かでもこの作品に込められた想いが誰か
に伝わったのかもしれないのだと思うと私は
嬉しくて仕方がなかった。

作品はいつも私に語りかけてくれた。
どんな作品でも必ず誰かの想いや願いが入
っていて、それは作品の命となって見た人に伝
わる。
血の通った人間が作り出したものだから、そ
の作品も命を持つのだと思う。

あの日、ふるふると震えながらもどうにかそ
の事実を受け止めようとしていたユウマの姿
は私にとって印象的すぎて、その衝動と勢い
だけで私は作品を作った。
そこには本物の命の力があつた。それを私が
今度は他の誰か伝えようとした。

命は消えていなかった。微かかもしれないけ
れど、ユウマが覚えている。私が覚えている。
そして私の作品を見た誰かが覚えている
かもしれない。
未熟で上手に何かを伝えるにはまだまだ時間
のかかる私だけど、きっと伝えられる、その
想いさえ忘れなければ。
きっと作り出せる、私だけの命の形を。

優秀賞

勇気ある芸術家、ベルニーニ

林 遼 三重県 皇學館高等学校 1年

私は絵が好きだ。鑑賞などという高レベルなものまでにはいかないものの、昔から見るのも描くのも好きだった。だが、だからといって、芸術全般に興味があったわけではない。小学校の社会の教科書でみる、一般常識程度に知られた芸術作品達は、実に失礼とは十二分に心得ているのだが、私の頭を素通りして行く。もともと立体に興味は薄かったのだ。至極残念なことに。

図1 ジャン・ロレンツォ・ベルニーニ作
「アポロンとダフネ」、1625年、
ローマ、国立ボルゲーゼ美術館

そんな私が、立体に惚れた。テレビ画面という人の目に比べたら断然拙稚なメディアを通して見たのだが、それでも衝撃は強かった。その立体は、「アポロンとダフネ」（図1）という、彫刻。それを見たときは、まず疑いから入った。本当に人間の作品なのか？それから、すかさず乾いたスポンジが水を一気に吸い込むかのような勢いで、私の全身にも凄いの興奮が溢れ上がってきたのだ。こんなもの見たことが無い！

ジャン・ロレンツォ・ベルニーニは「瞬間」を捉えようとした。「アポロンとダフネ」はギリシア神話の中の話だ。アポロンに追われ逃げるダフネが、今まさに月桂樹に姿を変えようとしている場面である。私はこの作品を肉眼で確認したことはない。よって、

限られた角度からしか彫刻を見ていない。そのなかで一番気に入っている角度の写真を添付させてもらった。この角度から見ると、足の指先が月桂樹に変化しているのがわかる。本当に、細かく、繊細に。重たい大理石でできているというのに、今すぐ動き出しそうだ。服のしわ、月桂樹の細かい枝葉、うねる髪、ダフネの開け放された口に感じる人間的な表情……。どれをとってもかなりリアルさである。流れはいったん地面から、大きく大胆にダフネの指先に向かって流れ、それからダフネの指先からアポロンの投げ出された左足へと移る。そんなイメージだ。分かっていただけだと思うが、このベルニーニの作品は、石というにはあまりにも流動的すぎるのである。

この作品では「瞬間」が際立っている。彫刻には不可能といわれていた「瞬間」。それを見事に再現したこの作品は、その現場の風が感じられるほどだ。だが彼の作品には評価すべき魅力がもっとある。例をあげるならば、「リアル」と「柔らかさ」だ。確かにこの作品は先ほど述べたようにリアルさはかなりのものだし、他の彫刻には見られない柔らかさも持ち合わせている。けれどもやはりこの作品はなんと言っても「瞬間」がメインだ。「リアル」と「柔らかさ」ではない。

上図2、ジャン・ロレンツォ・ベルニーニ作
「プロセルピナの掠奪」、1621年

下図3、ジャン・ロレンツォ・ベルニーニ作
「福者ルドヴィカ・アルベルトーニ」、1671年頃

そこで、「プロセルピナの掠奪」（図2）と「福者ルドヴィカ・アルベルトーニ」（図3）を見てもらいたい。どうだろう。一際リアルで柔らかくはないだろうか。特に「プロセルピナの掠奪」での、食い込み沈む女の肉、実に柔らかい！冥界の王プルートが穀物の女神の娘、プロセルピナを冥界に連れ去ろうとしている「瞬間」の彫刻だ。プロセルピナの空に投げ出された右手と必死に抵抗する左手は、まるで動画を停止させた、という感じだ。驚きと絶望にかられる彼女の顔には涙が見られ、あまりの悲劇にプルートへの怒りがこみ上げてくる。

「福者ルドヴィカ・アルベルトーニ」で驚かされたのは、もう石であることをとうに忘れさせるこのリアルさ。服のしわの美しさに、全く製作過程を想像できない。死の苦しみのなか、それでも神の元にいける喜びからの恍惚の表情。本当にこれが死に際の人間か、と疑ってしまうほどだ。とにかく、彫刻を超越している。私はこれらの作品を、石と感じたことはない。どうしても高級なモッツアレラチーズでできているように思ってしまうのだ。

ベルニーニは語る。『私は、大理石をあたかもロウであるかのように扱うという困難を克服してきた。、、、古代人達がこれを成し

遂げなかった理由は、多分大理石を自分の意志に従わせるという勇気が彼らに欠けていたからでしょう。』（石鍋真澄著作「ベルニーニ」より）

西洋人は昔から、自然を敵とみなし、支配しようとしてきた。それを裏返せば、西洋人達は自然に酷い恐怖心があったということではないだろうか。そして彼らは自然に愛憎を抱きながら、破壊という支配行為を続けてきた。

だが、本当の意味での支配は破壊ではない。対象の長所も短所もひっくりめた全てを受け入れ、自らと同化するというのである。恐怖し、忌み嫌うものを受け入れ同化する、ということは、非常に困難なことといえるだろう。その点、大理石という自然を、まるで自らの指先のように操ったベルニーニは、最も勇気ある芸術家と呼ぶにふさわしいのではないだろうか。

引用・参考資料

図1、図2、図3 Web Gallery of Art (<http://www.wga.hu/>)

石鍋真澄著作「ベルニーニ」

優秀賞

モノクロの世界を抜け出して

早藤 優樹

栃木県立宇都宮中央女子高等学校 1年

私が入った部は、モノクロの世界の中になりました。

中学校まで、運動部にいた私ですが、高校では全く逆の文化部、しかも書道部に入りました。書道の経験は、授業や夏休みの宿題で仕方なくやるといった程度でゼロに近いほどでしたが、初心者の私でも何とかかなりそうで、楽そうという浅はかな理由での入部でした。

部室でもある、書道教室に足を踏み入れたとき、先輩方が黙々と白い紙に墨をまとった筆を走らせる姿に感動したのをよく覚えています。

それから、少しずつ私は書道というものの心髄にふれていきました。全ての基礎となる古典から筆法などを学んでいく臨書。日本の書を学ぶ仮名。自分の気持ちを好きな言葉や好きなアーティストの歌詞にのせて書く創作。普通の筆の何倍もの大きさの筆で、紙で、全身を使って作る大字書。楽そうだななど思っていました。そんなことは全くなく、多く練習したの方が上手いという、努力の成果が目に見えて分かる厳しい世界だと知りました。私の周りには、書道の上手な人ばかりだったので、自然と多くのことを吸収し、成長していくことが出来ました。そして、白と黒のコントラストが綺麗なこのモノクロの

世界に魅了され、私はどんどんのめり込んでいくようになっていきました。

そんなときに出会ったのが彩色石膏刻字と呼ばれるものでした。彩色石膏刻字とは、創作の一部で、石膏に自分の書いた文字を彫り、スプレーや絵の具を用いて、色をつけ、そこに色紙を貼り付けたものです。いつもの白と黒の単調な世界とは対照的で、色鮮やかな世界がまた新しく広がっていったのです。古き良き書道に新しい風が入ったようで小さな胸の高ぶりを覚えました。この小さな興奮がより良い創作意欲へとつながり、石膏刻字に気持ちを入れ直して臨みました。

『瞬』という字を書きました。

ここで私が表現したかったのは、過去や未来へと通じるたった一瞬、この一瞬を大切に生きたいという気持ちでした。過去の一瞬を思い出し、照れたり、恥ずかしくなったり、悲しんだり、怒ったり、幸せな気持ちになったりします。その一瞬を未来で作ることが出来るのは、自分だけなのだから、今を大切にしたいという思いを込めたのです。

世界中どこへでもつながっていて、その飛沫に今を感じる事が出来る海を、過去へでも未来にでもつながっている空を、イメージして石膏のバックを色づけました。特に空は私がとても好きなものの一つで、空に「繋が



早藤優樹「瞬」
2009 24cm×27cm×1cm

さいときから引越しが多かったため、長いときをずっと同じところで過ごすということがほとんどありませんでした。したがって、遠いところに住む友達も少なくありません。だからでしょうか、空を見ると誰かを近くに感じられるのです。一人ではない、いつもよりも強くなれるような気がするのです。短い間でしか一緒にいられないと分かっているからこそ「一瞬」の大切さが誰よりも分かると思うのです。この「一瞬」を私だけでなく、多くの人に大切にしてほしい。そんな願いも込めて作りました。

その後、この作品は書道部の部展に数ある作品の中の一つとして出展されました。石膏刻字が展示されている一角はカラフルで、異

彩を放っていたような気がします。私の作品は多くの中のたった一つでしたが、見に来てくださった人たちの瞳にはどのように映ったのでしょうか。少しでも私の作品に目が留まって、気持ちが伝われば嬉しいです。そして、さらに上を目指して切磋琢磨していきたいです。

モノクロの世界を抜け出して、そこに見えたのは、過去と未来で、自分を見つめ直すことでした。

優秀賞

失いからの再出発

深須 砂里

群馬県立西邑楽高等学校 3年

『淡々としているよね』
何か、音を立てて勢いよく弾けた。

2年の冬。今まで、粘土で人体の首像から全身像まで作ってきて、着々と作品を作る手も慣れてきた。でも、楽しいのにどこか空っぽな感じがする。技術がついてくる代わりに感情の渦がない。溢れ出すような思いが伝わらない。粘土に触れる度に不安になってきた。何かを失っている気がして、原因が分からない見えないものに対してただ、独りで泣く事しかできなかつた。

悲しみと、蝕まれていく感覚に囚われたまま、3年の夏休みにはいった。3年生は卒業制作展がある。家族の首像を作ろうと思っていて私に、先生は「遠慮しないで好きなことを、思い切りやりなさい」と言った。好きなことを…思い切り…。また振り出しに戻る臆病な自分。

しかし、変わる時が来た。

『淡々としているよね。デッサンも、彫刻もさ』
翌日、別の先生にデッサンの講評をしてもらった時に、弾けた。今までわだかまっていた私の心を一瞬のうちに翻した。それだ！それが、私が失いつつあった勢いや感情の起伏を押し潰す原因だ。手のリズム跡が無い作品が語る実際だった。もう、私に迷いなんてない。
思い切りつくってやる。いままでの自分の作品に負けない位に。

やりたい事が一気に固まった。以前から興味があり、そして、彫った跡が明確に出る木彫で、大好きな愛犬の「うに」を作ろう。ポーズはお尻を上げ、頭を低くする、遊んでの姿勢だ。その日のうちに丸太を選び、のみを研いだ。自分でも驚くほど久しぶりに行動的な自分を見た。「淡々としている」なんて自分の性格からきているかもしれない。でも、今回の木彫で何かが変われるという根拠の無い自信があった。

彫り始めると思ったより木が硬く、のみが弾かれる。素材との衝突が始まる。チェーンソーで溝を作ったのみで削る工程を幾ら繰り返してもなかなか小さくならず、形が見えてこない。真夏の空の下、汗が滴る程、無我夢中に彫り続けた。何度も、まるで砂漠を永遠に歩き続ける感覚に陥った。

彫り進めると、顔の部分が足りない為、木を足すことにした。面を平らにし、木と木同士を合わせるのが難しい。父にだぼで固定してもらうまでとても時間かかった。顔がつくと少し全体が見えてきて感動した。夏休みの半分を家で制作していると、近所の人にカバかい。と言われ、翌日に豚かい。その翌日に熊かい。と言われ、まだ犬にならない複雑な気持ちだが、木の「うに」は少しずつ犬になろうとしている。耳も足りず、継ぎ足し、尻尾も足した。すると、「うに」が木の「うに」に対して同じ姿勢で一吠えした。笑うと同時にやる気が一層湧いてきた。

そして、段々とイメージが手を仲介して木の塊に現れ始めた。今まで粘土で何度もしてきた作業なのに、意識してのみを動かすと、打つごとに想いがこもる。

夏休みも終わり、学校での制作が再開されると、5人の先生と教育実習生による中間講習会があった。足りないと思っつけたお尻の木が曖昧な位置と形で彫り進まないのでは。という話しになり、潔く切ってしまうと新たに足したほうが良いと言う事になった。そして、新たに足してみると表現しなかった身体の流れが出てきて、それからは、迷い無く一気に彫り進めることが出来た。

しかし、形がまとまってくると、足りないところ、彫りすぎたところが次々と出てくる。不十分なところを足しては削りを繰り返していった結果、小さいところまで合わせると13個の木から成り立つ木の「うに」になってしまった。最初は継ぎ足すのが嫌だった。色も違うし、木目も合わない。それに、合わせたところに隙間が空いてしまう。こんな嫌だなあと思った。しかし、試行錯誤して足していくと、つい、木の「うに」に跨って制作してしまうほどとても愛着がある。

最後の、のみ跡を残すと、夕暮れの赤い光を纏い、しっかりと自分の影を落とす木の「うに」を見た。その時、その姿、この空気、制作過程で感じた喜怒哀楽も、全て心に刻みつけたくなった。そして、ゆっくりと眼を閉じ、思い切り「今」を吸った。すると、瞼の裏を擦る優しく、温かい記憶が甦る。



深須砂里《circle》木 2009年
80×36×150

小学3年生の時の事、夕暮れ時に曾祖父の居る離れの扉を開けると。そこには、石の猫が曾祖父の手に触られてすごく気持ちよさそうにする。愛猫の愛らしさを形にした曾祖父が作った石の猫。障子から漏れる赤い光の中、笑みだけ浮かべた曾祖父の傍でつられて笑顔になって眺めた石の猫。想いが立体となって、存在証明の影をそこに落とす。ここに私が彫刻をやる原点がある。あの時みた感動と今が重なる。原点をこれからも大事にしたいと思い、タイトルに囲むという意味で「circle」と付けた。囲むという行為は原点があり、再び原点に戻る。過去を振り返ることができた貴重な体験が出来た。

こんなにも、自分と戦い、素材と衝突したのは初めてだった。しかし、今までで一番辛くて、今までで一番新鮮で、楽しい作品が出来た。これからは、この体験を自信にして制作していきたい。

優秀賞

聖母と天使のひかりとひかり

藤 真知恵

滋賀県立膳所高等学校 2年

そこは二人だけの世界であって、そうではなかった。カルロ・ドルチの「受胎告知 天使」(図1)と「受胎告知 聖母」(図2)である。天使は胸の前で手を交差させ、聖母は少女のような手を握り合わせて、うやうやしく頭を垂れている。どちらの世界にも背景はなく、ただ神の子の懐妊を知らせに来た者と知らされる者の二人のみ、その世界には存在する。だが違うのだ。天使と聖母。二人の表情は大変安らかで、落ち着いた幸せに満ちている。彼女達にそのような表情をさせるのは、神、その人ただひとりである。敬虔な信仰心を持った少女、マリアの心には常に神が存在し、また神も、マリアの清らかな身体と共にある。天使ガブリエルはただひたすらに神を愛し、神は彼女と等しくなる。受胎告知は告げる者も告げられる者も、互いに一人ではなかった事が、二人の表情から読み取れる。そこには神がいた。

まず、その美しさに立ち止まった。私が二つの作品とであったのは京都市美術館の「ルーブル美術館展」においてである。いくつかの部屋を周る中、柔らかなタッチで描かれた、二人の女性に目が止まった。それぞれの額縁の中で向かい合う美しい人。私は彼女らのまとう衣服を見、その絵の意味を理解していった。「受胎告知」。そこで私は少し疑問に思った。私が見る限り、彼女は女性だった。天使ガブリエルである。ガブリエルは天使である。性別はない。聖母と比較して男性に近い形でかけられる事も多いなか、このガブリエルは美しい女性であった。なぜドルチは

ガブリエルを女性のように描いたのであろうか。マリアもまた、美しかった。聖母としての威厳よりも、その身の清らかさ、神を思う一途な心が伝わってきた。このような二人が向かい合っている様子は、大変華があった。

背景のない暗闇の中で、その闇を照らすのは、ただただ二人の放つ光のみであった。二人とも透き通るような白い肌をもち、天使の柔らかそうな巻き毛は光を反射してきらめき、聖母の背後からは後光がさしていた。その時私はふと違和感を覚えた。天使と聖母、光り輝くように美しい二人は、その輝き方に違いがあった。

天使を輝かしているのは、上から差し込む光であった。実際には上から光が差し込んでいくわけではないが、彼女の肌は、髪は、何かの光を反射していた。また彼女に映る光が、彼女から発せられたものではない事は、その横顔にかかる影からも分かる。彼女の髪は、うなじは、美しく光り輝いているが、こちらから見て顔の向こう半分には、完璧に陰が落ちている。特に額などを見ると、彼女の顔にはすっかり陰がさしているような錯覚をおぼえ、その下のほうにある、慎ましやかだが、ふつくと良いカタチをした唇の微妙な曲線がないことには、憂いを帯びた表情にも見える。彼女自身は光を放つ存在ではないのだ。天使は常に、天からの光をその背後に背負っている。天使は聖なる存在である。しかし天使は神の使いである。その名の通り天の使徒である。使いは自らが輝く存在ではない。太陽の光を反射し輝く月のように、とてつもな

く神秘的なそれは、自ら輝こうとはしない。ただ唯一の人に、忠実に仕えるだけなのだ。カルロ・ドルチはそう考えたに違いない。彼女のその輝き方。これは彼女が神の使いであることに起因するものなのだ。

私は頭の中ではこのように結論付けた。しかし心のどこかで、まるで天使は聖母の比較対象として描かれているようだと感じていた。聖母の際立つ美しさ。それを表すために、決して聖母ほど輝くことのない天使を、女性のように描いて、比べさせたのではないかと。しかし聖なる二人に対してこの考えは少し無礼すぎるようであった。

聖母を輝かしているのは、自身の放つ光であった。彼女は光を放つ存在であった。なぜなら、神の子をその身に宿す運命に置かれた瞬間、彼女も聖なる存在となったからである。彼女は聖母なのだ。聖母マリアは、そういう意味ではかなり天使と違う描かれ方をされている。私は彼女の透き通るような肌を通して、まさに彼女の内側から湧き出る光を見た。聖母像と言うものは、ドルチにとってある種の大切なものであったのではないだろうか。天使と聖母、二人ともまるで生の少女のような肌をもっているが、よくよく比べてみると、聖母の肌の輝きは、天使のものとは比べ物にならない。あまりに白い。というより、透明なのだ。マリアは、穢れなき少女である。この透き通るような肌は、少女のその身の透明であることを証明しようとしているようである。彼女の少女たる部分は、血色の良い、あどけない唇や、ふっくらとした、世

俗の疲れをまだ知らないであろうその指からも覗える。

受胎告知の二つの――二人の絵。半身像として描かれた二人の女性。背景も何もないこの絵から読み取することは出来ないが、カルロ・ドルチは二人の位置関係をどう思い描いていたのだろうか。二人は同じ位置にひざまずいていたのか、聖母は椅子に座っていたのか、天使は宙に浮かんでいたのか。限られた世界を枠の中に切り取られたからこそ、様々な思いをめぐらせる事が出来る。ただ、二人がどのような位置関係にあらうと、天使は神に対する月として、聖母は新たなる恒星として、そこに存在したのだろうか。

図1 カロ・ドルチ 1655 受胎告知、天使
-ルヴル美術館 1907 x 2500

図2 カロ・ドルチ 1655 受胎告知、聖母
-ルヴル美術館 2154 x 2780

引用・参考資料

写真共有サイト「フォト蔵」 (<http://photozou.jp/>)

優秀賞

苦痛による覚醒

山下 真依

熊本県立第二高等学校 2年

「松井冬子」。私が初めて彼女を知り、その作品を目にしたのは昨年—高校1年生の冬にたまたま見た深夜番組だった。始めはただ何とは無しに眺めていただけだったが、次々と現れては消える彼女の作品に、いつの間にか食い入るように画面を見つめ、そして胸をときめかせていた。

—これが日本画なのか！！

番組内で数多く紹介された彼女の作品の中でも私が一番印象に残ったのは『世界中の子と友達になれる』、この作品だ。(図1)

図1 松井冬子『世界中の子と友達になれる』
181.8×227.3cm 絹本着色 2002年 卒業制作

画面いっぱいに咲き誇る藤の花、それに連なるように群がる雀蜂、老婆のように腰を曲げ耳を澄ます少女、赤ん坊のいない揺りかご、それらが繊細なタッチで描かれている。全体的に色彩を抑えた画面の中、ぼんやりと発光するようにそこに存在する少女。

その肌は磁器のように冷たく滑らかでどこか現実味の無い幻や蜃気楼、幽霊のような雰

囲気を漂わせており、じっと見つめていると清々しいがどこか気分が沈んでいくような不思議な気分になる。

この作品には独特の雰囲気があり、日本画なのに油画のようなものが感じ取れたり、描かれている女性の美しさにはどこか男性的な表情も垣間見られたりと、彼女の作品には多くの矛盾が孕まれており、なおさらその印象を強めているのだろう。

そしてこういった幻想的な矛盾や雰囲気が、私の日本画に対する古典的だったイメージを見事に視覚のみで破壊し、私に驚愕をもたらした。

この出会いは決して偶然じゃない、私は彼女について様々な事を調べた。彼女の制作スタイルは非常に綿密で、内蔵や筋肉等をモチーフにして描くことが多いからか、数多くのデッサンや生物の中身や構造を知るための解剖をこなし、その後下書きを何度も何度も繰り返してようやく制作に取りかかる。そうすることで余計な感情を禁欲的なまでに削ぎ落とし、殺しても殺しきれない強烈な情念を繊細な筆で描き起こす。

そうして生み出された作品は彼女の生々しい感情ともつかぬものと、僅かながらの理性との危ういバランスによって成り立っており、まるで悶絶の末によって吐き出された彼女の肉片のようだ。例えようの無いくらいの

凄まじい負のエネルギーと、鬱屈とした感情が凝縮されているからこそ圧倒され、恐怖を覚える。

彼女自身最も思い入れのある作品だと言うこの作品。初めこのタイトルを聞いて絵を見たときには、はつらつとした子供のような明快なタイトルと、この絵の雰囲気とあまりにも違い過ぎてつい首を傾げてしまった。しかし、ここにも彼女のメッセージは隠されていたのだ。

タイトルに使われているこの言葉は彼女が幼少の頃本気で信じていた言葉であり、また一生のテーマだと言う。成長していく過程でそれが現実的に考えて不可能だと知ったときに感じた自分の創り上げて来た精神世界が崩壊する予感から、狂う一歩手前の幸福をタイトルに込めているように感じた。

彼女はこの作品だけに限らず、多くの作品に自身の痛みや虐げられた女性の痛みを投影させている、それはあまりに攻撃的過ぎるフェミニズムと、尚且つ痛みであるそれを堂々と見せびらかし男性に対して嘲笑を浮かべるナルシズムにより、それを見た者にまで痛みを思い起こさせる。彼女は絵を媒体とする視覚攻撃によって、人々の気付かない内に根付いた狂気を抉り出し、それを目の元に露にするのだ。そしてそれによって生じた狂気への痛みは本人に帰ることなく、最終的に

は彼女の絵によって昇華される。彼女はその絵をもって彼女自身の狂気の本元となる理不尽な暴力と痛み、擬似的な生と死の循環を永遠に繰り返させているのである。

繰り返し襲う狂気、その狂気に侵される苦痛の中に見えた絶頂、その一瞬の刹那に彼女は美を見出したのだ。

引用・参考資料

NHK 教育ETV特集「痛みが美に変わる時～画家・松井冬子の世界」

『美術手帳』（美術出版社、2008年、p11～53）

事務局後記

高校生という時期は、最も多感な時期であるとしばしば言われます。そんな時アートに触れている応募者の高校生たちは、それを通してどう成長しているのでしょうか。私自身もアートライティングというものに取り組んだ者として、ふとそんなことを考えました。制作を行い、表現に苦しみながら新しい視点を見出していく人。素晴らしいと思えるアート作品と出会い、感動し、心を豊かにする人。また、アートを介して人と出会い、様々な絆を結ぶ人。彼らとアートの関わり方はそれぞれに違いますが、アートを通して何かに気付いていることに共通点があるのではないかと思います。彼らはその「気づき」に非常に敏感です。「気づき」があれば、それについて悩んだり、受け入れたり、反発したりしながら、自分の糧にしているのではないのでしょうか。

しかし、その経験を文章にする＝アートライティングする、ということは思ったよりも難しいことです。私自身がアートライティングをしたときは、ことばを選ぶのにひどく悩んだことを覚えています。自分の中にあるものや目に見える形として存在するアートを何らかのことばにすると、急に客観的なものに変化してしまったように感じ、どうも違うという思いが拭えなくなってしまったのです。きっと彼らの中にも同じようなことを感じた人がいたと思います。しかし、それはアートライティングでは乗り越えなければならない壁です。時間をかけて推敲したり、思いきって消してみたり、他の人に読んでもらったり、様々な方法で解決しなければなりません。彼らはその過程を通して、今までにはなかった新たな「気づき」をしたのではないのでしょうか。

第3回となった今回、過去と比べて最も多い応募をいただきました。授業で取り組んでくださった学校もありましたし、個人的な興味からメールをくれた人もいます。事務局としては非常にうれしいことでした。しかし、それを選考していく作業はとても辛いものになりました。受付時に全ての作品に触れた事務局としては、残したいと思える作品が次々と浮かび、なかなか選びきれないのです。応募数と同じく、力作も数多くあったからでしょう。しかし、私自身としては、自分と同じような経験をした彼らに感情移入していたのかもしれない。

秋田美緒 博士前期課程芸術専攻芸術支援領域一年

第三回目の開催となる「高校生アートライター大賞」に事務局として関わってみて感じたことを後記に代えさせていただきます。私にとって、「高校生アートライター大賞」との関わりは今回で三度目となります。これまでも、授賞式に参加したり、学生として審査に携わったりと、それぞれに思い出がありますが、今回は最初から最後まで時間をかけて関わったことにより、一層思い入れの強いものとなりました。事務局としては、参加者からの応募メールを受け付け、部門ごとに整理し、円滑な審査を進めるといった仕事为主でした。このように受付の最前線にいて、高校生の皆さんとアートライティングとの出会いの現場と直に向き合うことができ、貴重な体験となりました。個人で応募してくださった方や学校単位で応募してくださった方々など、徐々に増えていく原稿を拝見しながら、アートライティングが少しずつ浸透してきたことを実感する日々でした。

アートライティングという言葉はまだ生まれただけなので、文章を書いている高校生にとっても、そうした活動を見守ってくださる学校の先生方にとっても方向性を探りながらの作業だったかと思われます。それゆえに、送られてくる原稿にもある種の緊張感のようなものを感じることがありました。もちろん、「アートについて書く」という経験は多くの高校生にとって初めてだったことでしょうし、それに挑戦することもまた一つ勇気のいることであつたと思われませんが、一つひとつの文章に新鮮なものが見方があらわれており、味わい深く拝読させていただきました。私が高校生だった頃にはこうした企画はなかったので、真剣にアートライティングに挑戦する場が整えられているというのはそれだけで興味深いことであり、今の高校生を羨ましくも思います。このチャンスをどう活かしていくかはそれぞれの意志によるところではありますが、少なくともそのような環境を形成するお手伝いができたのは美術教育に関心のある私にとっては非常にありがたいものでした。こうした機会を活用した教育実践が展開されることにより、美術教育の領域も少しずつ広がっていくのではないのでしょうか。今後、ここで育まれたアートを語る様々な言葉がまた新たなアートを生み出していくのを期待します。

市川寛也 博士前期課程芸術専攻芸術支援領域一年

第2回に引き続き、ジャーナリストの穴澤さん（第1回から）、教育政策研究所の奥村先生、美術館から光田先生を外務選考委員としてお招きし、高校生たちの作品を選んでいただくことができました。先生方のアートライティングへの深いご理解と高校生への暖かい励ましに、感謝申し上げます。また、多忙な中で運営を見守っていただいた筑波大学の先生方に感謝いたします。

過去の第1回、第2回のコンテストでは、私の学群と大学院の芸術支援の授業を受講する学生たちを中心にフル動員して、一連の選考プロセスから表彰式の運営まで、裏方的な作業をこなしてきました。今回の運営で特筆できることは、選考委員としても美術史と芸術支援のほぼ全教員が関わり、学生の選考委員として学群の芸術学専攻の多くの学生が参加してくれたことです。もう一つは、9か月に渡る私の海外出張のため、インターネットを通して、筑波にいる大学院生の秋田さん、市川さんと連絡を取りながら受付と選考の作業を進めたことです。最終選考でも海の向こう（こちら？）からビデオ会議で議論することができました。事務局の二人には物理的な作業量だけでなく、責任からくる緊張が伴ったと思いますが、先を読んだ素早い対応で困難な運営を無事進めてくれました。合わせて、芸術支援の大学院生の大塚さんと水澤さん、さらに、学群の芸術専攻生の皆さんの協力と貢献を讃えたいと思います。

何より、アートライティングに挑戦してくれた高校生の皆さん、そしてその努力を支えてくださった高校の先生方、ご家族、友人の皆さん等すべてのサポーターの方々に、心から感謝申し上げます。

直江俊雄

第3回高校生アートライター大賞優秀作品集

発行：平成22年3月 筑波大学大学院人間総合科学研究科芸術専攻

本書は、平成21年度筑波大学社会貢献プロジェクトの一環として刊行されました。

第3回高校生アートライター大賞優秀作品集

筑波大学大学院人間総合科学研究科芸術専攻

平成22年3月